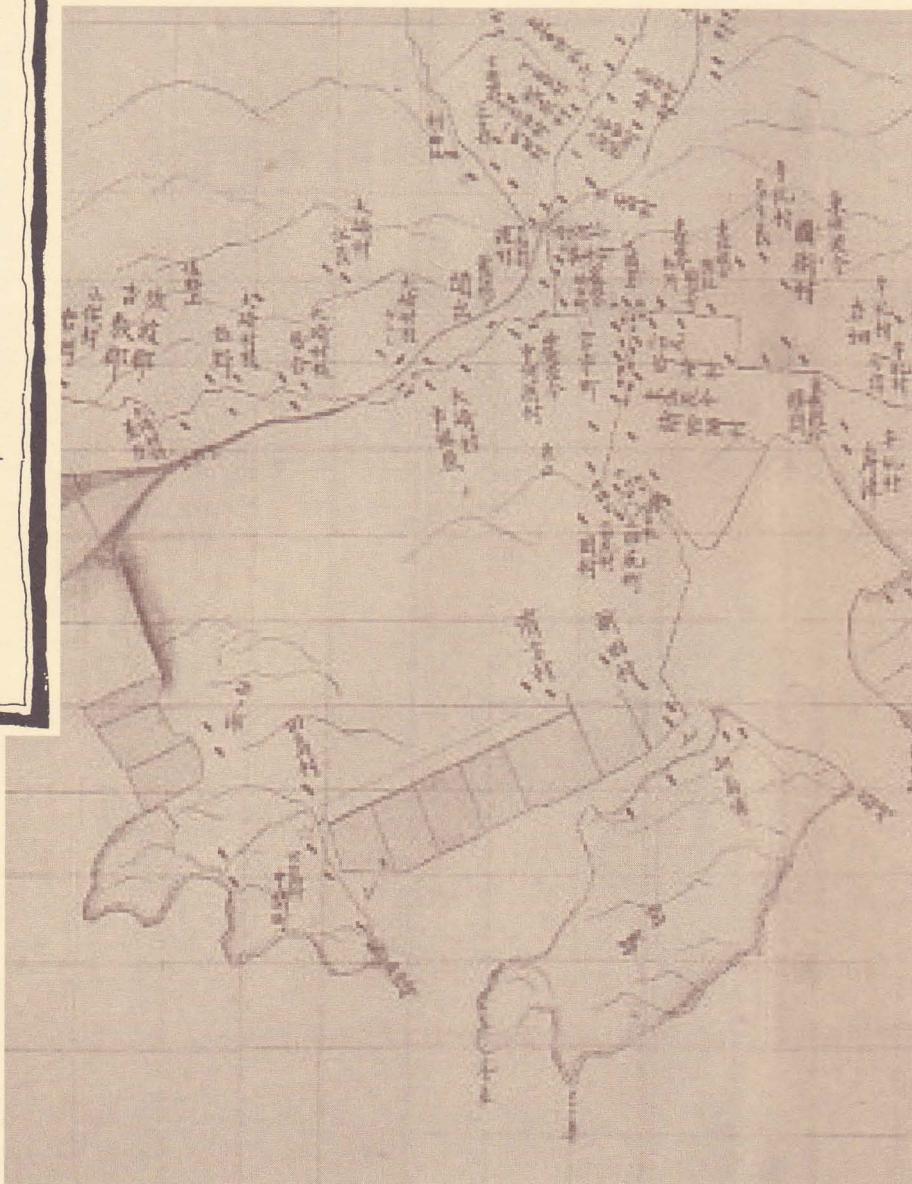


伊能忠敬研究

研究

二〇〇九年 第五八号

史料と伊能図



伊能忠敬研究会

原図（縦型）の左下隅にあたる。彩色部分の少ない議会図書館大

図のなかで、黄色く着色された広大な塩田が目を惹く。

「さばりよう」
湾奥は三田尻、東・西佐波令、宮市などで、一帯は現在の防府市域である。四方に展開している測線は、第五次測量の文化三年（一八〇六）四月、第七次測量の文化六年十二月、第八次測量の文化十一年（一八一三）十月に順次測量された。第八次（九州第二回）測量の往路、文化九年一月には無測で通過している。

三田尻は毛利藩御船手組の根拠地、藩の公邸も置かれた要地で、米・塩などの積出港としても重要であった。古くから製塩が行われたが、元禄二年（一六九九）の古浜以来、中浜・鶴浜・大浜・江泊浜、西浦浜の「三田尻六ヶ所浜」が次々に築造され、入浜式製塩を行つた。播州赤穂に次ぐ大生産地で、北前船で日本海岸各地に出荷され、藩の収入源となつた。入浜式とは潮の大きな干満差を利用して、海水を自動的に塩浜に導入するもので、人力で揚げる揚浜式より大規模な生産ができる。今は工業用地に変わつたが、一角に「三田尻塩田記念産業公園」があり、往時の諸施設が再現されている。「防府市」の名は周防國の国府に由来する。地図上の惣社、国分寺、国衙村などの記載がそのいわれを物語る。国分寺の西には天満宮がある。菅原道真の死の翌年、延喜四年（九〇四）に建立された日本最初の天満宮という。太宰府天満宮は延喜五年創建である。「天満宮殿回廊大に壯麗なり」（測量日記）。宮市は天満宮の門前町で、測量日記では、東・西佐波令の枝村であり、東が四分、西が六分と説明されている。文化六・九・十年と都合三回止宿した宮市の本陣兄部盤右衛門家は鎌倉時代から続く旧家・豪商で、江戸時代初期から本陣に定められた。鈴木純子（題字は伊能忠敬の筆跡）

目次

58号

卷頭

史跡探訪8「浅草天文台跡」

話題I

『大日本沿海実測録』
伊能図巡回フロア展 in さいたま

話題II

伊能忠敬と金沢八景

『浦島測量之図』描かれた風景判明

伊能大図総覧の地名と景観（十二）

浅草天文台・表彰状をいただいて

浮島が原自然公園を訪ねて

酒造家伊能三郎右衛門

伊能ヒサ

研究ノート

伊能忠敬研究（八）忠敬の見た風景

柏木家文書（四）

梵天を立てた所は三十万から四十万箇所

名著『伊能忠敬』（二）

伊能塾講座

伊能塾講座

大野弥三郎の墓を訪ねて

九州・新潟支部便り

「献花のつどい」「二つの地図展 in 九州」
『わが故郷の忠敬測量物語』

忠敬談話室

お便りから 日々の話題 お知らせ

表紙図解説 鈴木純子

首藤 郁夫 一

編集部

大沼 晃 六

星埜 由尚 一六

首藤 郁夫 二三

大沼 晃 二四

渡辺 一郎 二六

伊能 陽子 二八

石谷 春香 三〇

柏木 隆雄 四二

佐久間達夫 四八

前田 幸子 五五

鈴木 純子 六〇

垣見 壮一 六四

六二

石川・馬場 六四

六五

松宮・川上・井上・奥永・馬場 六五

編集部 七一

史跡探訪8

浅草天文台（須曆所御用屋敷）跡



『測量日記』冒頭「閏四月十九日、朝五ツ前深川出立。上下六人、伊能勘解由、門倉早太、平山宗平、伊能秀蔵、下人佐原吉助、新に召かかえ候長助なり。此日朝より小雨昼後に止。深川八幡宮参詣。それより両国通り浅草司天台へ立寄、高橋先生にて御酒を給、荷物は直に深川より千住宿へ積送。」

◇所在地 東京都台東区浅草橋三丁目交差点付近 ◇概要 幕府の天文観測・測量・地誌編纂・曆作成頒布・洋書翻訳などを行った役所。司天台、曆局、須曆屋敷などとも称され、天文方の役宅もここにあつた。一七八二年に牛込から移転、明治二年（一八六九）廃止された。

案内人

東京都府中市在住 首藤郁夫

JR総武線「浅草橋」駅前の大通り（江戸通）を左にしばらく行くと藏前橋通との交差点です。手前の左側に「浅草天文台」についての説明板がたててあります。

手元の「尾張屋清七版東都浅草絵図（一八六一年）」には、「須曆所御用屋敷」とあり、その肩のところに「天門ヤシキト云」と表示していました。天文台は、三味線堀川と新堀川の合流点のところにありました。現況では埋め立てられております。また、天文台には象限儀と簡天儀が設置されている高さ一〇メートル程の築山が敷地の中央にあつたのですが、この築山も平坦にならされています。したがって、正確なその位置がどこであったのかさらなる検討が必要と思われます。

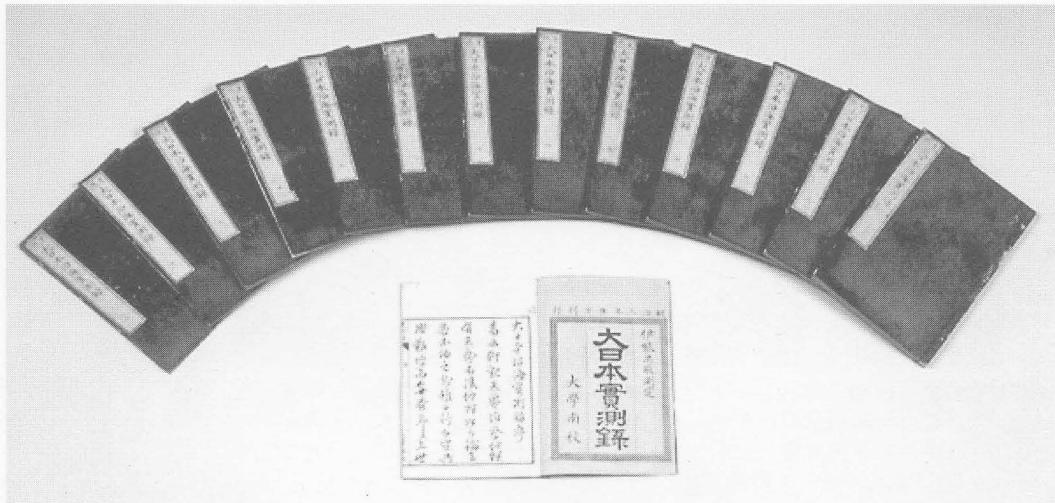
ところで、伊能忠敬の内弟子だった箱田良助（後に榎本家に養子として入籍）が三味線堀の組屋敷に居住していました。浅草天文台へは徒歩一〇分程のところで便利だったと考えられます。

私と伊能忠敬との関わりは、日本科学史学会関東支部で佐原の伊能忠敬旧宅を訪ねた時に遡ります。旧宅の土蔵が旧記念館となつて間もない頃でしたから随分昔のことと、伊能洋氏の御祖母「こう」様の説明も拝聴したはずです。その後、佐原の公民館で講演会がありました。伊能氏がご出演予定でしたが、体調がすぐれず残念ながら御欠席、斎藤茂太氏とNHKの川上アナウンサーの対談を開きました。それが機会となり入会しましたが、今も科学史と忠敬への興味は尽きません。

（すばる　いくお・科学史学会関東支部長）

江戸科学の拠点「浅草天文台」跡を訪ねて

れた『大日本沿海実測録』



『大日本沿海実測録』 大学南校版

画像資料：神戸市立博物館蔵

『大日本沿海実測録』

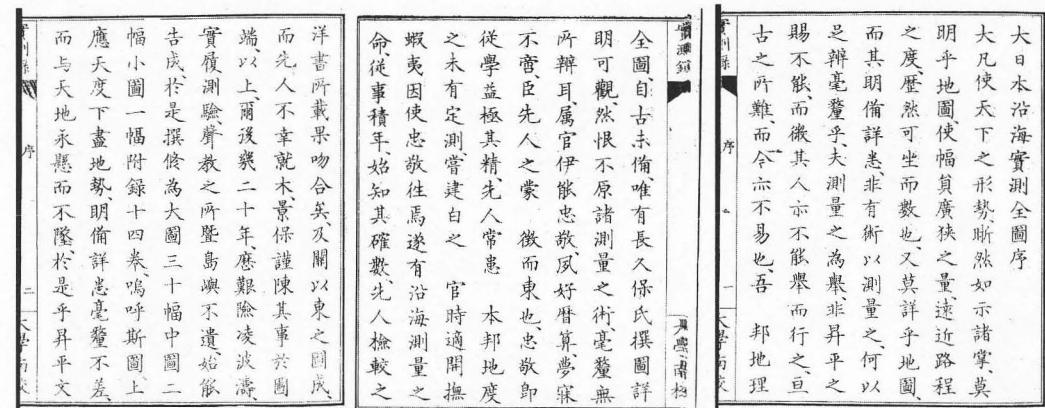
『大日本沿海実測録』は『大日本沿海実測図』大・中・小図（最終上呈版伊能図）の付録として文政四年（一八二二）に地図と合わせて幕府に上呈された。紅葉山文庫旧蔵の上呈本『輿地実測録』は国立公文書館所蔵、首巻および一～十三巻の計十四巻と「地図接成便覧」（大図二一枚の接合一覧図）一舗よりなる。明治三年（一八七〇）には大学南校（東京大学の前身）から、「図（便覧）を除く十四巻（首十一三巻）が『大日本実測録』として木版刷りで刊行されている。印刷本の原本は旧福井藩松平家所蔵の写本で、誤脱が少なからずあるとされる（大谷亮吉著『伊能忠敬』）。

首巻には高橋景保識「大日本沿海実測全図序」、伊能忠敬識「大日本沿海実測全図序」および「大日本沿海実測全図凡例」、また測量と地図作成に従事した天文方役人および忠敬の弟子たちの氏名が収録されている。伊能忠敬識とする序、凡例は久保木清淵の草稿による。これらの内容は大谷著『伊能忠敬』、保柳睦美著『伊能忠敬の科学的業績』に活字化されている。沿海、街道、島嶼・湖水周廻の順に全測量コースの約七、八〇〇地点（地名）を収録、うち約五、五〇〇については隣接地との距離を記載、一、一二七地点については緯度を記載する（保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』）。距離記載のないものは遠測の島嶼や山などである。

印刷本の全文は国立国会図書館近代デジタルライブラリーで閲覧ができる。

（鈴木純子）

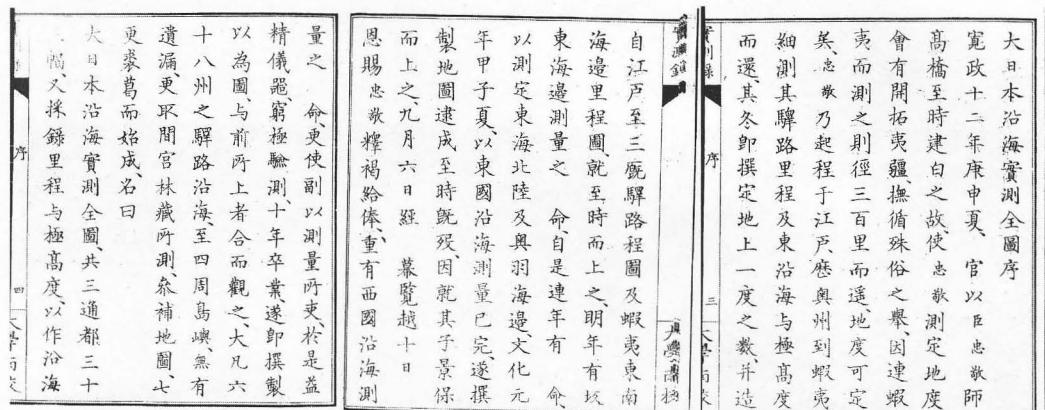
「大日本沿海実測図」とともに上呈さ



全國自古未備，唯有長久保氏撰圖詳明，可觀，然恨不原諸測量之術，毫釐無所辨耳。屬官伊能忠敬，夙好曆算，嘗寐不啻，臣先人之蒙徵而東也，忠敬卽從學，極其精。先人常患本邦地度之未有定測，嘗建白之。官時適開撫蝦夷，因使忠敬往焉，遂有沿海測量之命。從事積年，始知其確數。先人檢較之。

洋書所載果吻合矣，及關以東之國度，而先人不幸就木，景保謹陳其事於圖端以上。爾後幾二十年，歷艱險，凌波濤，實履測驗，聲教之所暨，島嶼不遺，始能告成。於是撰修為大圖三十幅，中圖二幅，小圖一幅，附錄十四卷，嗚呼斯圖上應天度，下盡地勢，明備詳悉，毫釐不差。而與天地永懸而不墜，於是乎昇平文

高橋景保識「大日本沿海實測全図序」

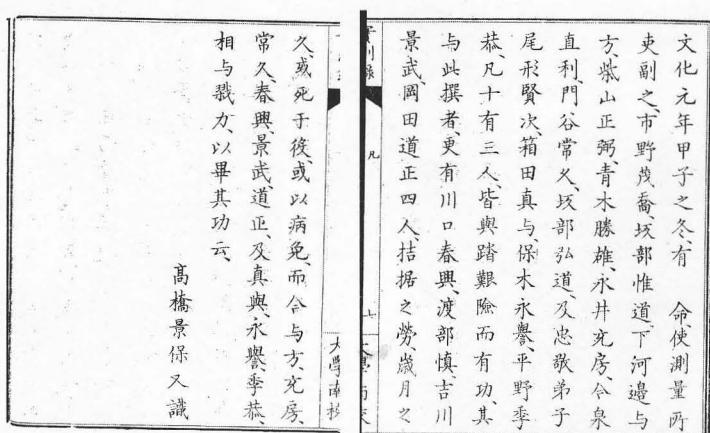


自江戸至三厩驛路程圖及蝦夷東南海邊里程圖，就至時而上之。明年有坡東海邊測量之命，自是連年有命以測定東海北陸及奥羽海邊文化元年甲子夏，以東國沿海測量已完，遂撰製地圖，建成至時既死，因就其子景保而上之。九月六日經幕覽越十日，恩賜忠敬耀褐給俸，重有西國沿海測

伊能忠敬識「大日本沿海實測全図序」

(右) 高橋景保識「測量ならびに地図作製に従事した天文方役人および忠敬の弟子たちの氏名」

『大日本沿海實測録』本文
画像資料：東京大学総合図書館蔵



久歿死于後，或以病免而令与方充房、常久春興、景武、道正、及真與、永譽、季恭、相与戮力，以畢其功云。

高橋景保又識

伊能忠敬の全業績が埼玉に集結

「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in さいたま」

編 集 部

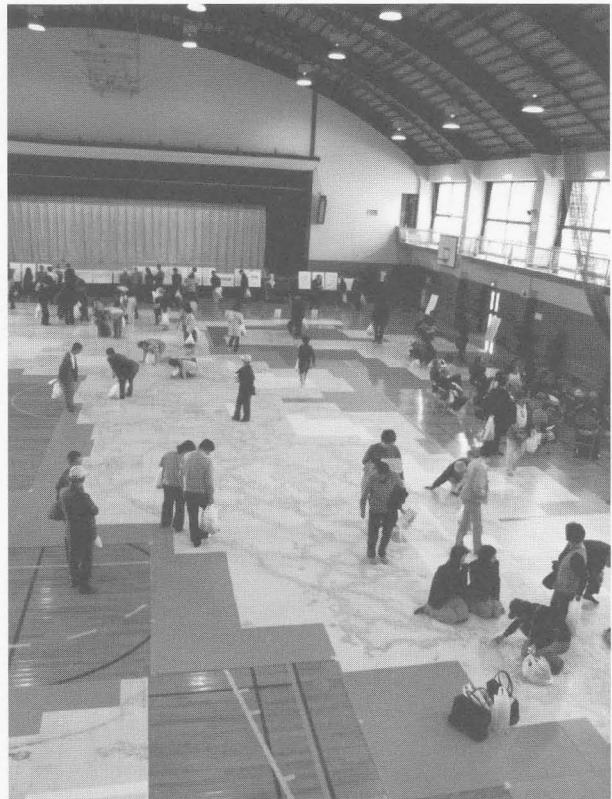
平成二一年一一月六日から八日まで、さいたま市与野体育館で「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in さいたま」が開催された。

このフロア展は、主催の埼玉新聞社の創刊六十五周年並びに伊能忠敬日本測量開始二一〇周年を記念する事業として伊能図フロア展さいたま実行委員会、埼玉土地家屋調査士会、(社)埼玉県測量設計業協会の共催、伊能忠敬研究会の協力で実施された。

会場となつた与野体育館はフロアいっぱいに伊能大図のパネルが敷き詰められ、観覧者は外階段でいつたん二階に上がり、ギャラリーを通つて舞台袖からフロアに下りるよう誘導された。ギャラリーから地図を見下ろした観覧者は、「あつ、能登半島。石川県はあそこよ!」などと、お目当ての場所を指さして声を弾ませていた。

フロアでは自分が住んでいる町や故郷の地名を探して多くの方が地図の上を行き来した。さいたま市付近には常に観覧者が群がり、なかには「全然知らない人と地図を見ながら長時間話して盛り上がり楽しかった」と嬉しそうに話す女性も。家族連れも多数来場した。映像コーナーでは「伊能忠敬」のビデオが放映され、用意された椅子席は常に満員。フロアの周囲に設置された説明パネルも人気で、となつて移動しながら伊能測量の実際に聞き入つていた。

午後から体育館内の和室で開かれた星埜代表理事の講演会「さいたまの伊能測量」は映像を交えた講話で満員御礼の盛況だった。



上・さいたま市付近の地図に見入る人々
左・盛況だった星埜代表の講演会





埼玉新聞 2009年10月28日

「伊能忠敬と金沢八景」

大沼 晃

江戸時代の中・後期を通して物見遊山の旅、今風に言えば観光旅行が盛んであった。

江戸近郊の観光コースとしてグループで大山・江ノ島・鎌倉・金沢めぐりをする旅が定着し、その生き生きとした江戸の旅文化の情景が安藤広重等の浮世絵や名所記・道中記（例えば『江ノ嶋ままで浜のさゞ波』）日本橋から江ノ島までの挿絵入道中記、天保四年（一八三三）刊行、里程・駅賃・宿賃・名所・名物・絵図入り）現在の観光ガイドブックに相当）に描かれている。江戸後期の横浜はまだまだ鄙びた漁村であったが、しかしながら江ノ島・鎌倉は現代と変らぬ観光都市として多くの物見遊山の客を引き寄せた。

今回は、第二次測量日記（資料提供、佐久間達夫氏）を読み解きながら、品川宿から江ノ島までの足跡を辿り、訪れた先での様子や出来事を披露しながら観光地・金沢八景を取り上げてみた。

測量日記に基づき一行の足取りを辿る。

享和元年（一八〇二）

四月一日 富岡八幡宮参詣→品川宿（送別酒宴）→川崎止宿

三日 雨天につき川崎宿逗留（宿替え止宿）

四日 川崎宿→東子安村→西子安村→神奈川宿→保土ヶ谷宿止宿

五日 保土ヶ谷宿→戸部村→尾張屋新田→吉田新田→中村→横浜

村→北方村→本郷村止宿

【ここら辺でひと休憩】

吉田新田の工事は、江戸の本材木町に住んでいた吉田勘兵衛（石

材・木材商）が、今から三五〇年ほど前の明暦二年（一六五六）に幕府の許可を得て入海を埋め立てて、途中挫折しながら寛文七年（一六六七）に新田が完成。横浜市の中区と南区の一部を含む広さ約三五万坪（横浜スタジアム四四個分）で全体の五分の四が田んぼで、残りの五分の一が畑や屋敷であったこと。

伊能忠敬一行は、完成してから一三〇余年経つてはいるが歩いた道を推測すると、現在のJR京浜東北線の関内駅から石川町駅に向かって通る半地下式の高速道路、当時そこは海であり、海と埋立地の境の一直線に伸びる潮除堤（しおよけつつみ）の上を横浜村に向けて、右手に農民の姿もまばらの田んぼを、左手に横浜の名前の由来と言われる横に長い砂浜を見ながら、歩を進めたのではなかろうか。伊能図を見ると砂州の先端までは赤線が入っていないので実測せず、遠望した地形だけを絵図面に落とし込んだようだ。

六日 本郷村→根岸村→滻頭村（昼食）→磯子村→森村三ヶ村→杉田村→富岡村止宿

七日 雨天につき富岡村逗留
八日 同村逗留

九日 富岡村→小柴村→寺前村→洲崎村→町屋村（五郎左衛門方で昼食）→能見堂迄測量→擲筆山地蔵院にて所々測量→入海を

通り赤井村→宿村（小泉あり、地名・釜利谷）→町屋村止宿
【ここら辺で、神奈川県立金沢文庫作成の金沢歴史地図を参考にしながら大休憩】

その一 伊能忠敬一行が訪れた五三年後（一八五四）の小柴沖に、

ペリーは七隻の艦隊を率いて停泊し、江戸幕府の人々を驚愕させた。

前年の一八五三年に来航（所謂黒船来航のこと）したペリーは、再来

航に備えて抜け目無く小柴沖一帯を測量し、帰航している。（山地学芸員談話引用）

その二 中世時代の六浦（むつら）は、鎌倉に隣接した江戸湾の良港で、鎌倉の東の玄関口として、人・物・情報が行き交う港湾都市であった。北条（金沢氏）実時が館を金沢に移し、菩提寺である称名寺を建立したため領地がある房総から年貢米や建築資材等々を木更津湊や富津湊に集め、船で回漕し洲崎湊に陸揚げした。鎌倉内に住む武士や庶民向けの物資は六浦湊に陸揚げした。

しかしながら、北条氏が滅び鎌倉が衰退すると共に人口が激減し、湊の機能が変り始めた。江戸期には、その役目が品川沖に取つて代わられた。

その三 金沢八景は、徳川光圀に招かれて明国から来日した心越禪師（しんえつぜんし）が、故郷杭州の西湖を思い出しながら詠んだ漢詩によつて有名になる。金沢八景の魅力は、海を基調とした自然の美しさに、人々の営みの跡を重ね合わせることによって成り立つている。

（金沢歴史散歩より引用）

安藤広重の八景画には、多くの帆船が行き交う湊の賑わいや塩田・漁船・潮干狩りなど海と関りながら暮らす様子が描かれている。（一〇ページ掲載の浮世絵参考のこと）

伊能忠敬も能見堂まで登り、辺りを測量したと日記に明記している。また、当日の天気は晴れのち曇りと記しているので、浮世絵に描かれたとおりの自然美が溢れる箱庭のようなすばらしい光景を目にしているものと確信する。ただし、惜しまず「絶景かな、絶景かな」と記録に残していないのが残念だ。（『武州金沢擲筆山地蔵院能見堂八景之画図』参照のこと）

その四 能見堂は、江戸期の寛文年間（一六六一～一六七二）徳川綱

吉時代）に久世大和守広之（旗本・広宣の三男として慶長十四年生れ。秀忠・家光・家綱三代に仕え、若年寄・老中を経て下総関宿城五万石の大名になった久世家初代当主）が再興した擲筆山地蔵院のことである。かつては、ここから武州金沢の海が一望できた。（現在は、能見堂緑地として痕跡があるだけ）

しかしながら、入海の新田開発や明治以後の旧海軍施設、民間軍工場の建設（故に、写真撮影は厳禁で一切記録なし）および国道十六号線の拡幅、戦後高度成長期の住宅開発等々で入海や平潟湾のほとんどが埋め立てられ、その原風景は失われたのである。京浜急行はかつての入海を分断するように走つており、金沢文庫駅も海の中なのだ。

十日 町屋村→野嶋測量→泥亀新田→瀬戸明神（三崎明神）→六浦

↓三艘→室木（昼食）→浦郷村止宿（松平大和守陣屋あり、ここより相模国三浦郡なり。）

【ここら辺でひと休憩】

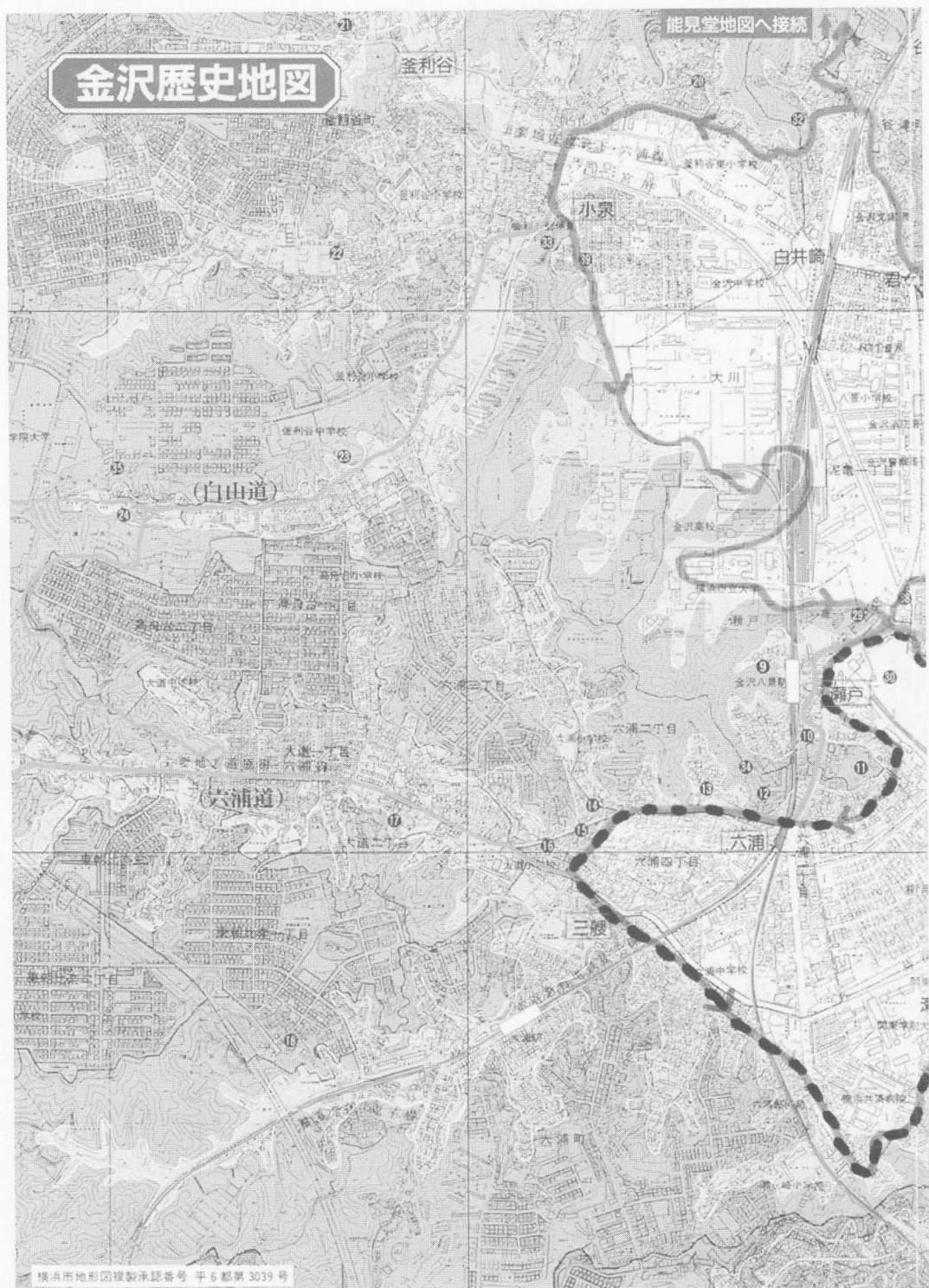
その一 野島のエピソードとして、ペリー艦隊が小柴沖で測量していた時、一隻がボートを下ろし、水を貰いに数人が上陸したと、ある資料に残っているとのこと。接触した漁民たちの驚きはいかほどのものであつただろうか。（山地学芸員談話引用）

その二 潬戸橋は海に架かる橋として日本最古の橋のこと。北条実時の孫の貞顕（さだあき）が造営した。橋が架かるまで入海を西に迂回し、白山道（しらやまみち）を抜けて鎌倉幕府まで出仕したり物資を運んだりしたが、不便なので朝日奈切通しを開き六浦道を整備し幹線道路とした。

現在は、国道への出入りに欠かせない交通要衝の橋になつていて、橋の周辺は釣り船屋が密集しており、休日には太公望でごつたがえす。



神奈川県立金沢文庫「金沢歴史散歩」パンフレット『金沢歴史地図』より



金沢八景

歌川広重画



称名晚鐘



瀬戸秋月



小泉夜雨



野島夕照



平潟落雁



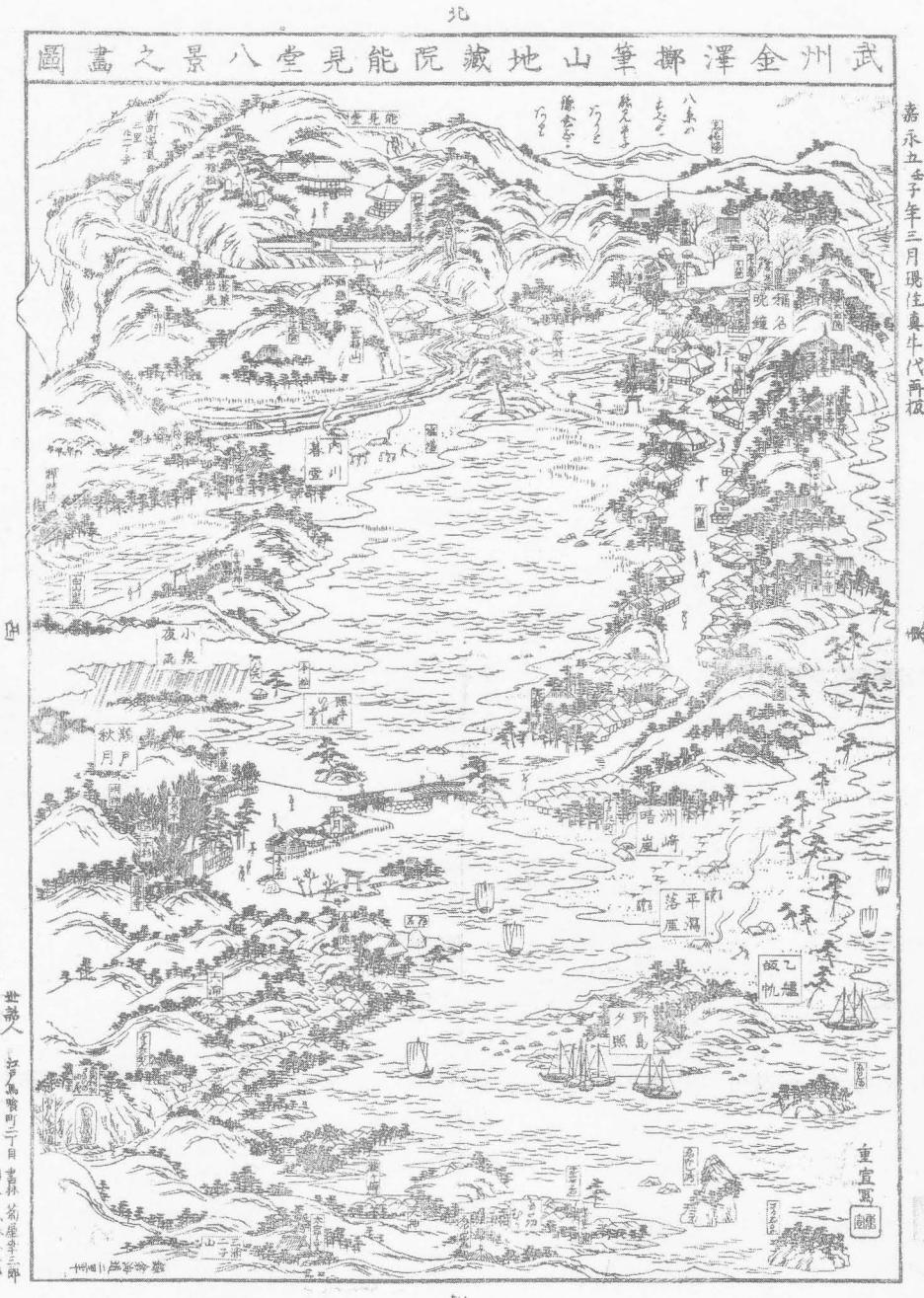
洲崎晴風



内川暮雪



乙艤帰帆



武州金澤擲筆山地藏院能見堂八景之畫圖

その三 瀬戸神社は、別名瀬戸三島神社と呼ばれている。国道十六号線脇にあまりにも見事な神社があるので由来を調べると、治承四年（一八〇）、源頼朝が伊豆で挙兵した際に、加護をもらつた三島明神をこの地に勧請し、社殿を建立したそうだ。祭神は、主神が大山祇命、配祭神として須佐之男命。他十一柱。

その四 浦之郷は、三浦半島の東京湾側の付け根の部分に位置し、半島関門の地である。浦之郷陣屋は、寛文三年（一六六三）から、途中会津藩領期の十年間を除き、天保十四年（一八四三）に至る一七〇年間の酒井・松平両藩の相州飛地藩領支配の拠点で、浦之郷（横須賀市追浜）代官所があつた。徳川氏が関東入国後、直轄地の年貢米を収納する倉を置き代官に支配させてきたが、酒井氏の領分となつてから、ここに陣屋（役所）を置いたとのこと。藤沢市・福原新一氏蔵の「相中留恩記略」に浦郷村の松平大和守陣屋風景画あり。

（逗子市史・通史編より引用）

十一日 浦郷村→田浦持船越→池ノ谷津→田浦本村→長浦村→逸見村
（昼食）→横須賀村止宿

十二日 横須賀村→深田村→公田村→大津村→伊勢町→走水村止宿
【こちら辺でひと休憩】

走水は、古東海道の水駅（すいえき）當時船四艘保有）で上総国府へ渡る海の道の玄関口であり、ヤマトタケル伝承の道として有名。

十三日 走水村→鴨居村→三軒家→腰掛→東浦賀→西浦賀止宿
【こちら辺でひと休憩】

三浦半島に限れば伊能図で湊を表す「赤で帆船形」を印している所は浦賀と三崎だけである。徳川家康の領国となつてから、浦賀に代官頭として長谷川長綱を任命し陣屋を置いた。「昔、源頼朝卿の鎌倉に住

まわせたまう時、金沢・榎戸・浦賀とて三の湊・・・（廻国雑記）」と記された、鎌倉以来の良港であり、中世以来の軍事上の重要な拠点でもある。家康は、この浦賀の地に三浦案針らに屋敷を持たせ、浦賀道を整備させ、海外貿易を盛んに行つたのである。

東浦賀および西浦賀とも浦賀奉行支配地で、湊は槍の穂先のように鋭く陸地に切り込んでおり水深も深く、周辺は小高い山に囲まれた良港であり現在も源家ゆかりの神社や咸臨丸出港の碑など当時の面影を多く残している。忠敬一行は、伊能図を見ると狭い海辺の町をぐるりと一回りしながら測量したと思われる。日記には、東浦は長九百間あり、西浦賀に番所あり、甚だ地狭にして奥行きなし。六、七間から十間に限る。当時浦賀奉行水野伯耆守と記述あり。

現在は、港の中ほどに東と西をつなぐ（全国でもめずらしい海の市道）渡船場があり、大人五〇円、五分ほどで簡単に渡れる。浦賀ドックが閉鎖・撤退してからペリー来航の町として町おこしに努めているが寂れる一方である。

十四日 西浦賀村→久里浜村→野比村→長沢村→津久井村→上富田村
止宿

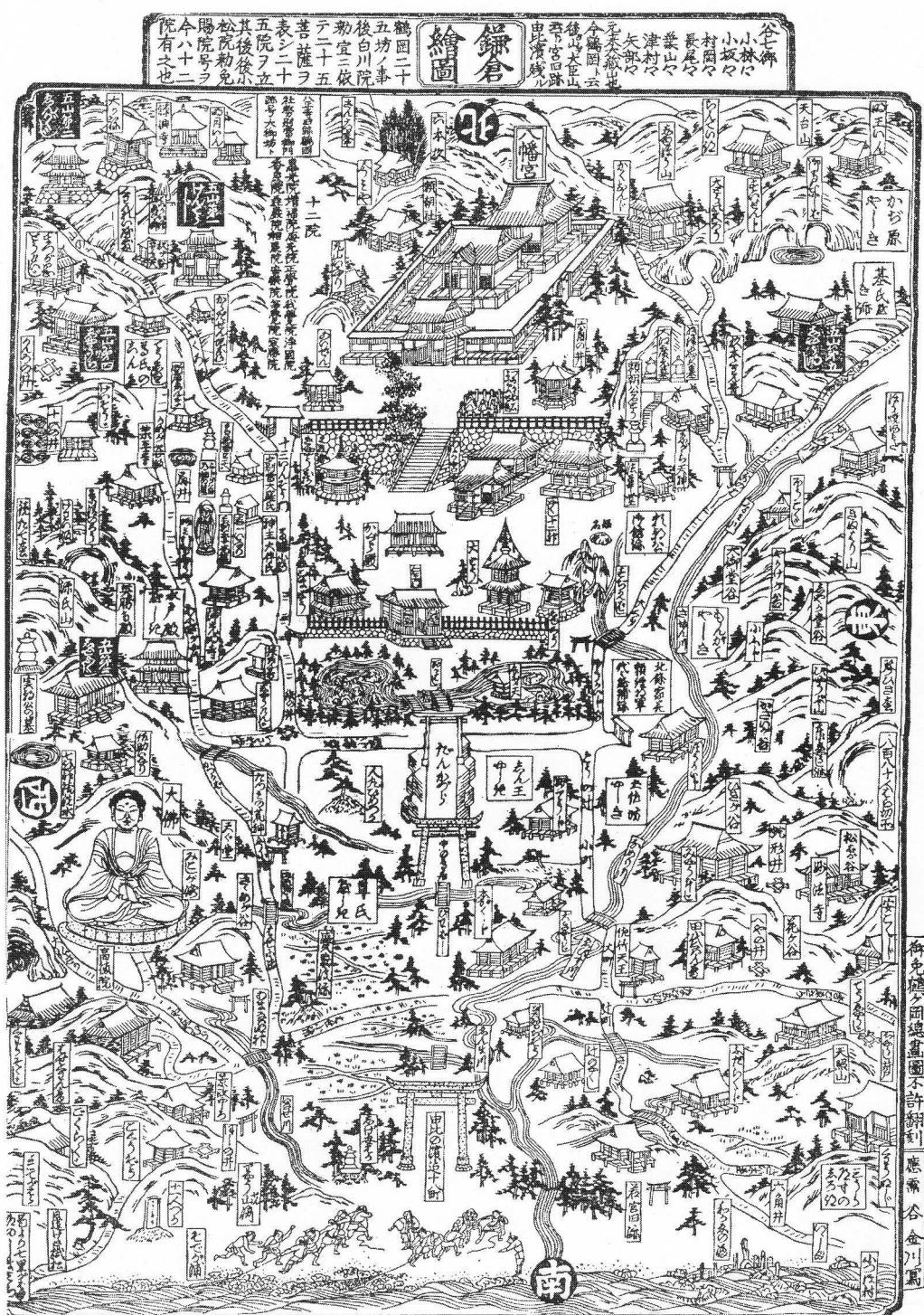
十五日 上富田村→菊名村→金田村→松輪村→毘沙門村→宮川村→向ヶ嶋村→三崎港止宿

十六日 三崎町→城村→二町谷村→諸磯村→網代村→三戸村→下宮田
村止宿

【こちら辺でひと休憩】

三崎を拠点に対岸の城ヶ島を測量しようとしたが、役人から島には道がないし、舟行も不可と言われ、遠見遠測したこと。

現在は島を一周することができる散策路が完備されており、「雨が降



鎌倉繪圖

る降る　城ヶ島の磯に・・・」の詩で有名な島崎藤村の歌碑がある。

やくかん、歩間・歩測のこと)を以つて測量→無測量で参
詣→建長寺・円覚寺・大仏→長谷村→坂下村→稻村ガ崎→
腰越村→江ノ島止宿

十七日 下宮田村→和田村→長井村→林村→大和田村→長坂村→佐島

村止宿

十八日 雨天につき逗留

十九日 雨天につき逗留

二十日 佐島村→芦名村→秋谷村→下山口村→一色村→堀内村→小坪

村止宿

【ここら辺でひと休憩】

小坪村(逗子市小坪)は、伊能図を見ると材木座村の間に赤い大丸

点があり、鎌倉郡との郡界の小さな漁村であることが分かる。文化八年(一八一〇)～安政六年(一八五九)間の平均人口は約二千人弱。

当時は、イワシ漁が盛んであつたらしいが、海岸に打ち寄せる海藻(モク)を拾い、近在の農民に田畠の肥料として売り払い相当の現金收入があつたそうだ。

特筆する事項として、逗子市役所の玄関ホールの壁に谷文晁の絵(大きく拡大した陶板焼き風のレリーフ)「鎧摺濱」を飾つてある。この絵は、谷文晁(江戸時代後期の日本の画家、文才家、和歌、漢詩、狂歌に秀でた人)一七六三(一八四一)が寛政五年(一七九三)に老中松平定信に随行(配下の勘定奉行・久世丹後守広民、代官江川太郎左衛門ほか)し、相模・伊豆などの沿岸を巡った折に風景を描いた「公余探勝図」のひとつであり、小坪でもう一枚「久野谷村」を描いている。伊能忠敬はその二枚とも見ているかも知れない。原画は、東博所蔵。

谷文晁のお墓は浅草源空寺。忠敬との縁が何かありそうな気がする。

【この辺でひと休憩】

三弁天とは、江ノ島には宗像三女神を祭つてるのでその女神を指している。中世以降、弁才天信仰は神道と日本土着の水神である市杵島姫命(もしくは宗像三女神)や宇賀神と習合して、神社の祭神のひとつとして祀られることが多いとのこと。弁才天信仰が盛んな土地は、前五七号で取り上げた広沼・沼津周辺のこと。

因みに、日本三大弁才天とは、①奈良県天川村・天河大弁財天、②滋賀県竹生島・宝嚴寺、③広島県宮島・大願寺の三箇所。残念ながら歌舞伎の演目「白波五人男」でよく知られている弁天小僧菊之助の啖呵(知らざあ言つて聞かせやしよう)に出てくる江ノ島の弁天様は仲間入りをしていない。

二十一日 小坪村→材木座村→由井浜より鶴が岡八幡宮まで脚間(き

(おおぬま　あきら・マニー&キヤリアマネジメントアドバイザー)

伊能忠敬の測量風景「浦島測量之図」



江戸後期の測量家、伊能忠敬 1

745-1818年の測量風景
を描いたものとしては、全国で2
点だけ現存している絵図のうちの
一つ「浦島測量之図」。これに描か
れた山々や集落が具体的にどこな
のか、広島県呉市内に現存してい
るが、広島県呉市教育委員会の井垣武久
主幹の調査で初めて特定された。

この絵図は絵巻物の形
式で、縦26・5cm、横4
20cm。1926年(大
正15年)発行の高等小学校教科書にも掲載された
ことがあり、古くから知
られた存在だった。安芸
国賀茂郡阿賀村(呉市)
の庄屋を代々勤めた宮尾
家に伝えられ、広島藩主
浅野家の紋章や船印が描
かれていることなどから、
伊能忠敬が1806

年に現在の呉市付近を測量し
た際の風景を描いたものであるこ
とは分かつてた。ただ、複数の
場面が一つの画面に描かれてお
り、具体的な測量地点は正確には
特定できていなかった。

井垣さんは、この絵図に描かれ
ている象の背に似た特徴的な山
が、呉市の広市民センターが所蔵
している郷土の版画家、朝井清の
絵画と酷似していることを確
認された。

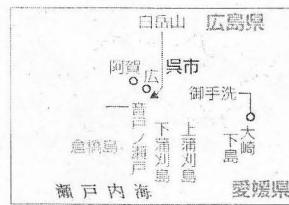
この結果、三手に分かれた測量
隊の所在地は、それぞれ右から現
在の呉市の長浜地区から広地区、
阿賀地区、首戸地区であることが
確認された。

この調査結果について、伊能忠
敬研究会の渡辺一郎名誉代表は
「ほぼ間違いないと思う」と評価
した上で、「これだけ周囲の地形
が細かく描かれているということ
は、絵師が測量に同行し、実際の
景色を見て描いた可能性が高い」
と指摘。もう一つの絵図が、大崎
下島(呉市)での測量風景を描い
た「御手洗測量之図」であると
を挙げ、「なぜ広島藩内だけに測
量図が残されたのかを考えると、
重要な手がかりになる」と大きな
関心を寄せている。(岸岡正人)

伊能忠敬の測量風景を描いた絵図は、「浦島測量之図」「御手洗測量之図」の二点がいずれも広島県呉市内に現存しているが、その一つ「浦島測量図」に描かれた風景が、現在の呉市内の三ヶ所であることを呉市教育委員会の井垣主幹が特定した。井垣氏は昨年十一月、伊能研究会の有志による研修旅行の際に訪問した広市民センターでこの「測量図」に描かれた風景について詳細に解説された。絵図に描かれた特徴的な山の形を手掛かりに、具体的な測量地点を特定できたという。この調査結果について、渡辺名誉代表は「ほぼ間違いないと思う」と述べている。

描かれた正確な地点判明

「浦島測量之図」(宮古市立弘氏高託付呉市入船山記念館蔵)の一部。右後方の象の背に似た山が白岳山。現在の呉市内に現存する阿賀地区での測量風景を描いた場面と特定された。浜辺では「入足」たちが1列に並び、両端に立てられたほんてんの間の距離を測っている



この結果、三手に分かれた測量
隊の所在地は、それぞれ右から現
在の呉市の長浜地区から広地区、
阿賀地区、首戸地区であることが
確認された。

上・読売新聞 21年11月27日

広市民センターで「浦島測量
図」の風景を説明する井垣氏



伊能大図総覧の地名と景観（十二）

星 桀 由 尚

伊豆七島

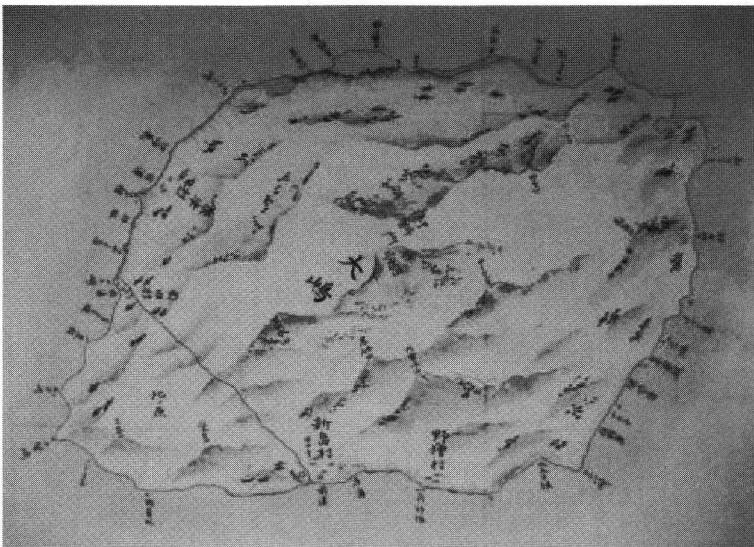
文化十二年五月一八日、下田で風待ちのため長逗留した後伊豆七島へ向け出帆した。十一月一〇日に下田港に戻るまで漂流して三崎港へ戻るなど苦労の多い測量行であった。周知の通り、忠敬は高齢のため参加していない。

大島

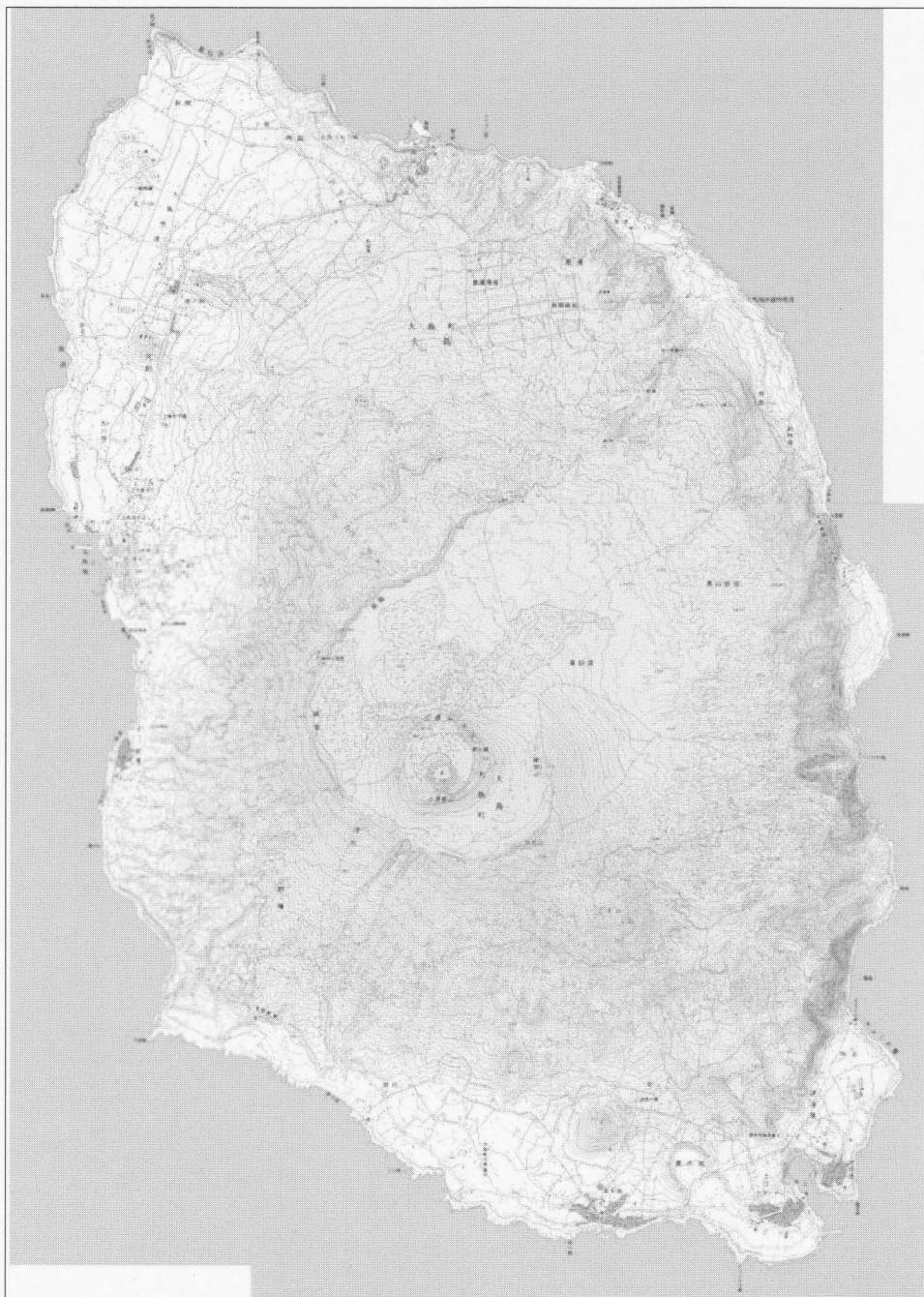
大島では岡田村から反時計回りに島を測量している。岡田村と新島村を結ぶ横切り測線も設けられている。岡田村と新島村の間には大図に注記される北ノ原のほか、和泉ヶ原、中野原と言った草原が広がることが「測量日記」に記されている。北ノ原には現在大島空港ができる。大図に描かれる三峰山、愛宕山も地形図に見ることができる。

波浮湊は、「測量日記」によれば、瀬が続いて小舟しか入ることがきなかつたが、平六という者が願い出て瀬を掘り抜き、深さ十三尋（約二〇 m）、湊の入り口は一町（約一一〇 m）となり、舟の行き来も増え、平六から才六の代となり、財をなした。測量隊も才六の屋敷に宿泊している。地形図を見ると、波浮港は、古い火口の地形であることが判読できる。避難港としては、最良の港であったであろう。

大島の川は、すべて黄色で描いた川である。大島は、火山島であるため、透水性の高い火山噴出物からできている。そのため、透水性が高く、地表水となつて流れることが少ない。即ち涸れ川となつていることが多く、そのため、河川を黄色く描いているものと考えられる。火山ばかりでなく、扇状地の河川を同じように黄色く描いている例もほかに見られる。



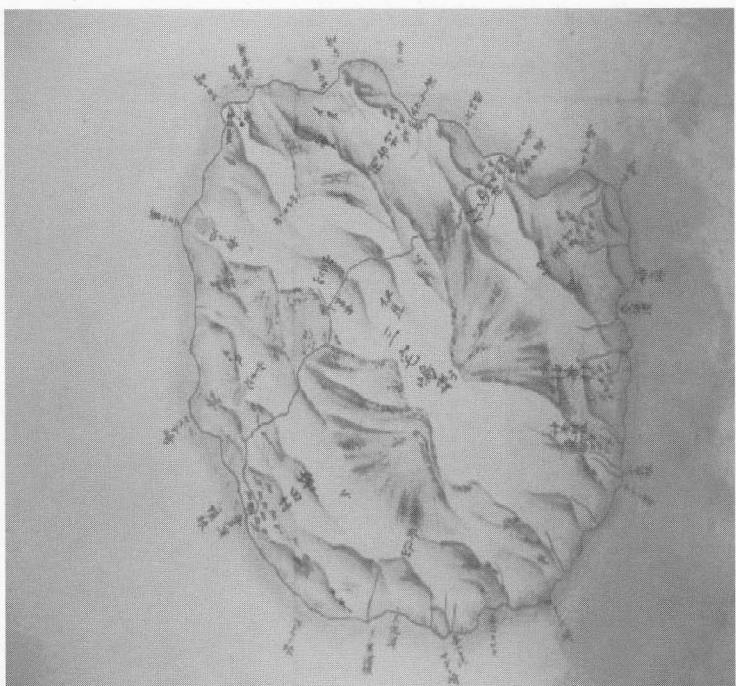
第1図 大図 102号 大島



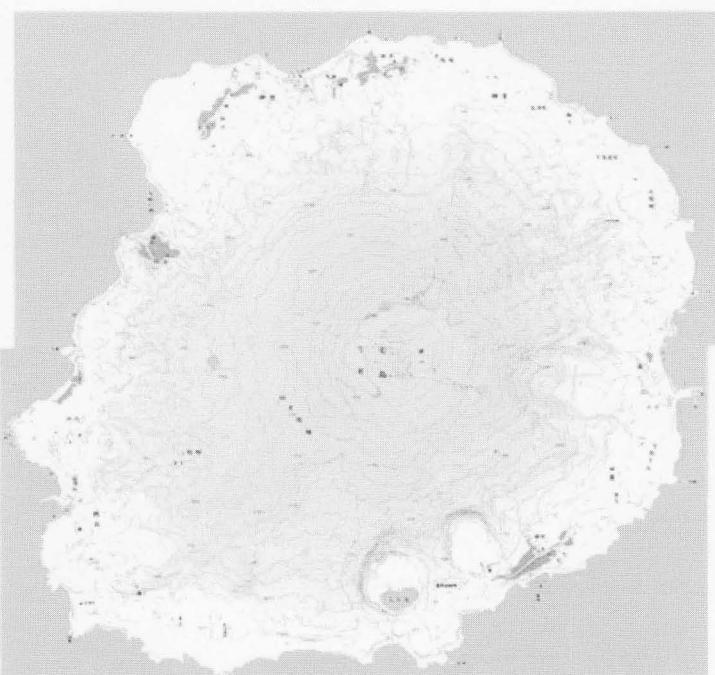
第2図 彩色地形図 大島

三宅島

文化十二年五月一八日下田から八丈島を目指して出帆したが、御藏島から藪瀬波島を過ぎた辺りで逆風になり一九日に三宅島の伊谷村に上陸した。予定しない上陸であったが、伊谷村から神着村まで測量した。二一日には八丈島に向かい、翌日八丈に上陸することができた。六月二九日八丈島を出帆したが、途中四日間漂流して三浦半島の三崎

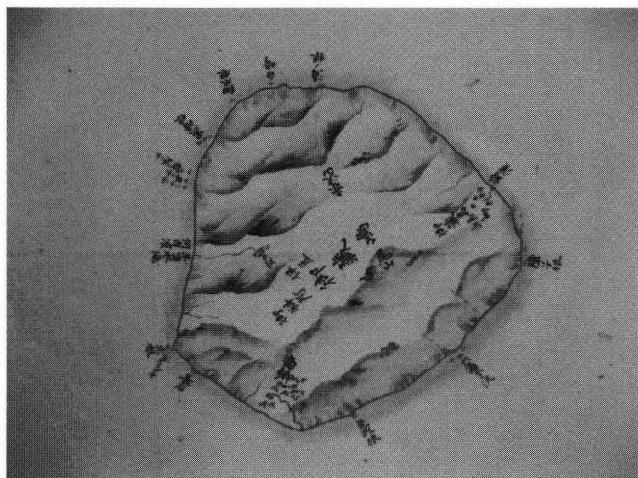


第3図 大図 104号 三宅島

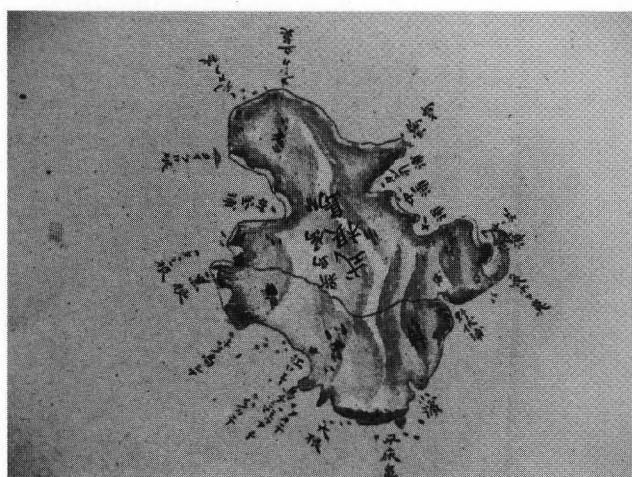


第4図 彩色地形図 三宅島

湊に着いてしまい、また風待ち滞留してようやく七月一日に三宅島に上陸した。この間の苦労は、現代人の我々には想像もつかないであろう。「測量日記」には、一同無事祝着と書かれている。安堵するとともに喜びも大きかったのである。しかし、三宅島についた翌日、御藏島に渡っているので、三宅島には七月二二日に戻り、翌日からようやく測量を始めている。神着村から時計回りに測量し、坪田



第5図 大図103号 御藏島



第6図 大図103号 式根島

村と伊谷を結ぶ横切り測線も坪田村と伊谷村から栄ノ木平で閉合させている。式内社富賀明神、山ミヨ池、新ミヨ池、山二ツ山には、測線が分岐している。山二ツ山では、七島の島々の遠測を行っている。山二ツ山の辺りは、「測量日記」には焼原と記されており、大図でも山は茶色に彩色されている。溶岩の累々とした原野であったと思われる。

山ミヨ池は地形図では大路池となり現存しているが、新ミヨ池は、新瀬池跡となり消滅している。昭和五八年の三宅島噴火のなせる技である。昭和五八年と平成の今次の噴火により伊能測量当時とは地形が大きく変わってしまった。

利島・新島・式根島・神津島・御藏島

風待ちを繰り返しながら御藏島、神津島、新島へと渡った。式根島

は、当時人家はなく、新島から日帰りで三回にわたって測量している。

利島は小さな島であるが、人家もあり新島から渡っている。御藏島は険阻な島で上陸時、出帆時には、村人が総出で海岸の岩場をならし、舟を引き上げ、舟を押し出した。誠に前代未聞の難島であると「測量

日記」には書かれている。御藏島には、本村と南郷の二つの集落があり、南郷には出作小屋四軒があり、総数二八軒で南郷は、害虫や湿気が多いと記されている。御藏島は、周囲を断崖絶壁に囲まれた軍艦のような島で、現在でも船の欠航が多い。このような島の海岸線を測量することは言語に絶するようなことだつたと見え、梯子や下げ縄などを用いて絶壁を上り下りしていることが「測量日記」には触れられている。

八丈島

五月二三日八丈島に上陸し、六月

二九日八丈島を出帆するまで約一ヶ月の間八丈島を測量した。「測量日記」によれば、舟から八丈島を遠望してから煙を上げ、ホラ貝を吹いて島の人々に知らせ、迎えの舟に引いてもらつて湊に入った。三根村の神浦(大図には神と書かれている)に上陸したが、岩石が多く舟掛の場所もないため舟を海岸に引き上げておか

府の舟があり、松林の中に御舟庫があつた。

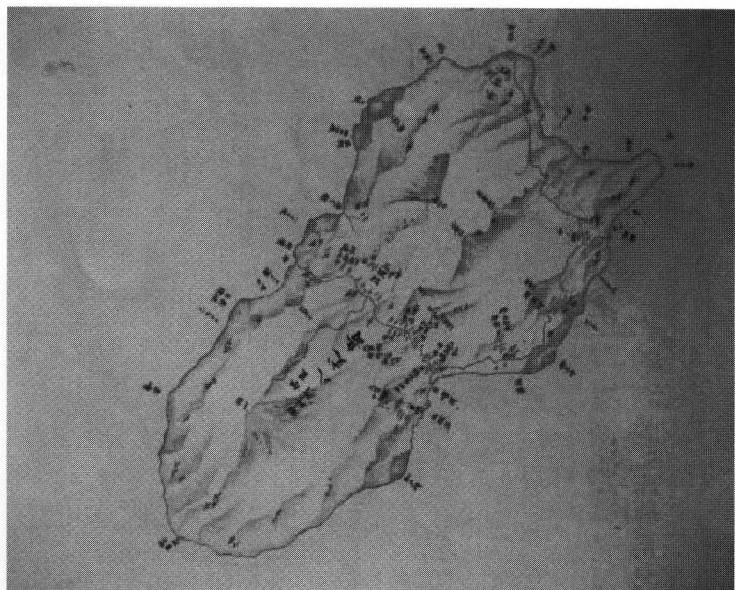
陣屋前から測量を始め、海岸に向かつたが、三〇間（約五〇m）先で道が分かれ、街道の測量のため大印の杭を打つた。陣屋は、大図に示される大賀郷神場にあつたものと考えられる。この杭から海岸に下り、前崎浜で前印の杭を打ち、島を一周するための印とする。そこから時計回りに海岸線を測量する。西山（八丈富士）の西岸を測量し、字日ノカタまで行き、日印の杭を打つたと「測量日記」には記されている。字日ノカタは、大図には記載されていない。

六月一日には日食となるため、島南端の末吉村に行き、垂搖球儀などを設置し日食の観測に備えた。しかし、天候に恵まれず観測は成功しなかつた。末吉村の街道は、山の中の坂道で難所であるとの記述が「測量日記」にある。八丈島は、二つの火山から成り、北半部の西山は未だ開析が進んでいないのに對し、南半部の東山は古い火山で開析が進み、多數の谷が刻まれている。そのため、測量には難儀したのである。末吉村への街道の途中の中之郷には、鉄砲の稽古場があり毎月六度村役人が集まり練習すると「測量日記」には記されている。どのようない目的があつたのだろうか。

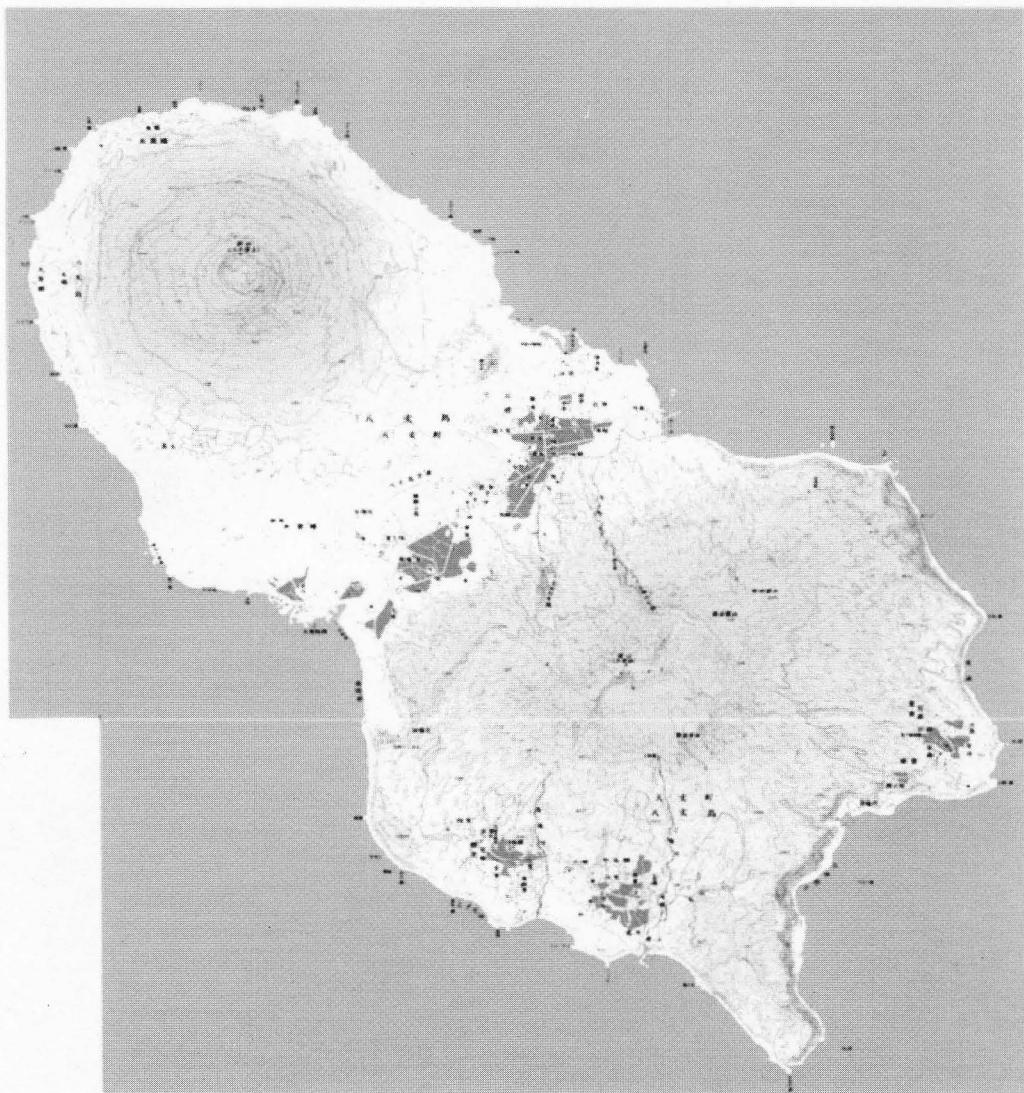
日食観測は不成功に終わつたが、大賀郷に戻り、日印の杭から時計回りに海岸線を測量し、八丈島の周囲を一周した。「測量日記」には、「海岸大絶壁」などとの記載も隨所に見られ、舟で先行して逆方向に測量して測線を繋いだり、測量に困難を極めたことが窺い知れる。また、末吉村で青ヶ島を遠測したり、小島（八丈小島）を遠測するための杭を打つたりしている。

「測量日記」には、大賀郷について家数三九軒、流人小屋七軒、寺院二軒、流罪人家一六軒と書かれている。寺院は、肉食妻帶であるとも書かれている。御舟置き場には御舟六〇〇石積二艘と書かれ、幕屋に宿泊した。

六月一日には八丈小島に渡り、三日かけて測量している。當時、八丈小島には、宇津木村、鳥打村の二村があり、源為朝を祀る八郎宮（八郎明神）があった。「測量日記」によれば、住人は男女合わせて四九三



第7図 大図 105号 八丈島

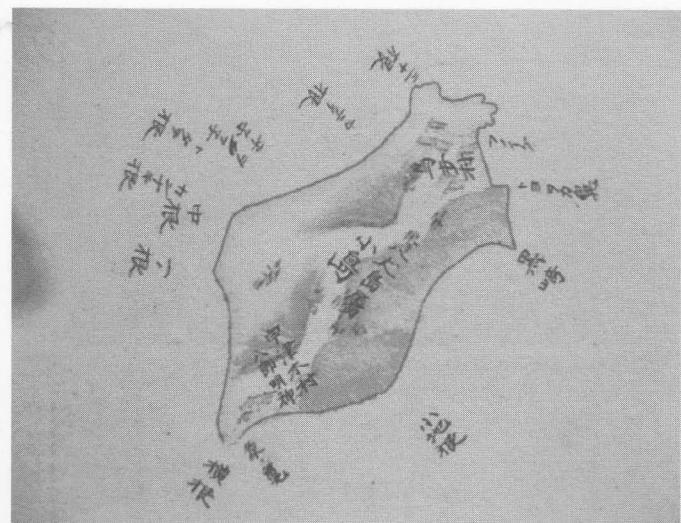


第8図 彩色地形図 八丈島

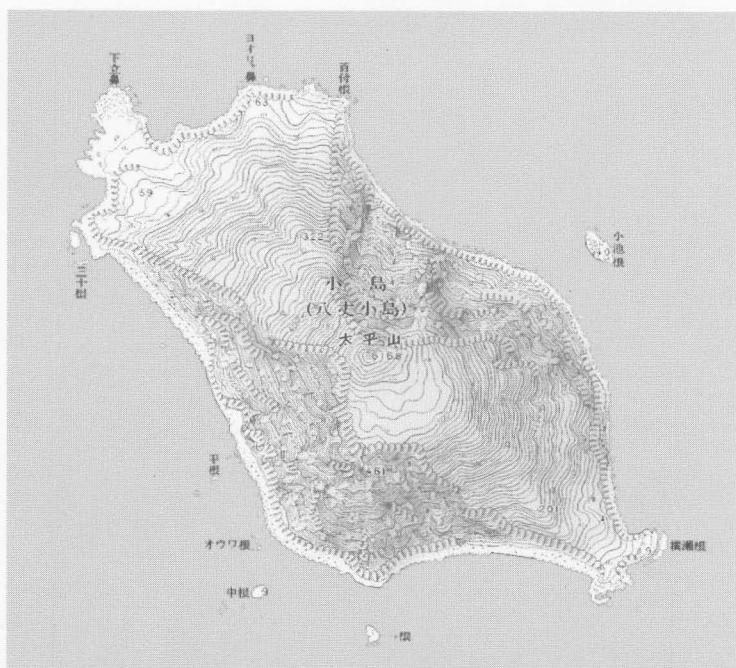
人、ほかに流人が六人と記載されている。八丈小島には、このほか日帰りで二回渡つており、三宅島、御藏島、青ヶ島の遠測を行つている。場所によつては、磁気に異常が見られ方位を正確に測れなかつたようである。八丈小島は、現在では、住民すべてが離島してしまひ、無人島となつてゐる。地形図を見ても、墓地の^ニと黒抹家屋の記号があるだけで、集落の痕跡や八郎明神も消されている。西山（八丈富士）も遠測のため数回にわたり登つてゐる。西山の頂上付近は雲に覆われることが多く、待機しても観測できないことも多かつたようである。西山には牛の牧場があつた。東海岸の御正体山でも御蔵島、三宅島、蘭灘波島を遠測している。蘭灘波島は見えるのが稀であると「測量日記」には記されている。蘭灘波島は大図にも描かれている。「測量日記」には、字名などの地名が詳細に記載されている。しかし、図にはこれらの地名のごく一部が記載されているに過ぎない。「大日本

「沿海輿地全図」には、これらの詳細な地名が記載されていたのか、今となっては知るよしもないが、八丈小島への三度の渡航、西山での待機、詳細な地名の調査など、今更ながらに伊能測量隊の仕事ぶりに敬服する。老齢のため、忠敬が指揮を執つていなかつたにも拘わらず、天文方の下役や弟子たちがこれだけの仕事をやり遂げたのは、長期にわたる全国測量の間に組織としての伊能測量隊に測量技術上、また隊の運営においても多くの様々な経験の蓄積があつたからであろう。

(ほしの よしひさ・代表理事・(社)日本測量協会副会長)



第9図 大図 105号 八丈小島



第10図 彩色地形図 八丈小島

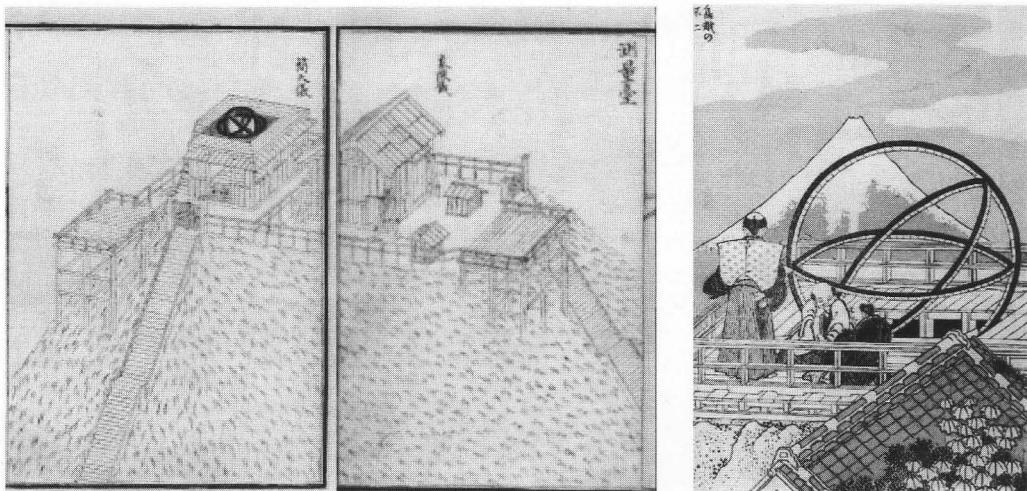
案内板「天文台跡」台東区浅草橋三丁目

この地点から西側、通りを一本隔てた区画（浅草橋三丁目二十一・二十二・二十三・二十四の全域及び十九・二十五・二十六番地の一部）には、江戸時代後期に幕府の天文と曆術・測量・地誌編纂・洋書翻訳などをを行う施設として天文台が置かれていた。天文台は、司天台、浅草天文台などと呼ばれ、天明二年（一七八二）牛込藁店（現・新宿区袋町）から移転、新築された。正式の名を「頒曆所御用屋敷」という。（略）

その規模は、「司天台の記」という史料によると、周囲約九十三・六メートル、高さ約九・三メートルの築山の上に、約五・五メートル四方の天文台が築かれ、四十三段の石段があった。また、別の史料「寛政曆書」では石壇は二箇所に設けられ、各五十四段あり、築山の高さは九メートルだったという。（略）

ここ浅草の天文台は、天文方高橋至時が寛政の改暦に際して観測した場所であり、至時の弟子には伊能忠敬がいる。忠敬は全国の測量を開始する以前に、深川の自宅からこの天文台までの距離を測り、緯度一度の長さを求めようとした。（略）明治一年に新政府によつて廃止された。

台東区教育委員会



『寛政曆書』卷十九 「測量台の図」

『富嶽百景』「鳥越の不二」葛飾北斎

「日本科学史学会」から表彰
表彰状をいただいて
首藤郁夫

五月二三日の年会懇親会で、永年会員だったことで、私を含む三名が表彰されました。

該当者は三十名ほどいた筈でしたから、予め「通信」にても該当者名を発表してあれば、唐突な感じを受けずにすんだのにと思いました。学会のためには何等貢献せずに表彰されるのは面映ゆい次第です。偶々前回（一九六二年）の九州年会プログラムを持参しており、高橋先生にお渡しできたのが、ささやかな記念になりました。

省みますと、当時の入会申込みには、紹介者が必要でした。理科大二部学生の小生が存じあげるのは、矢島祐利先生お一人だけでした。先生の授業は昼間だけでしたので、会社を休んで研究室に先生をお訪ねしましたが、ご返事はなかったので、一寸心配でしたが、『科学史研究』第二七号の入会者に名前が出ていたので安心しました。後年矢島先生の『科学史家の回想』を拝見すると科学史家志望者には職がないからやめなさいといわれた由、小生は就職していましたので、許されたのかなと思いました。

（日本科学史学会『科史学通信』三九二号より）

浮島ヶ原自然公園を訪ねて

大沼 晃

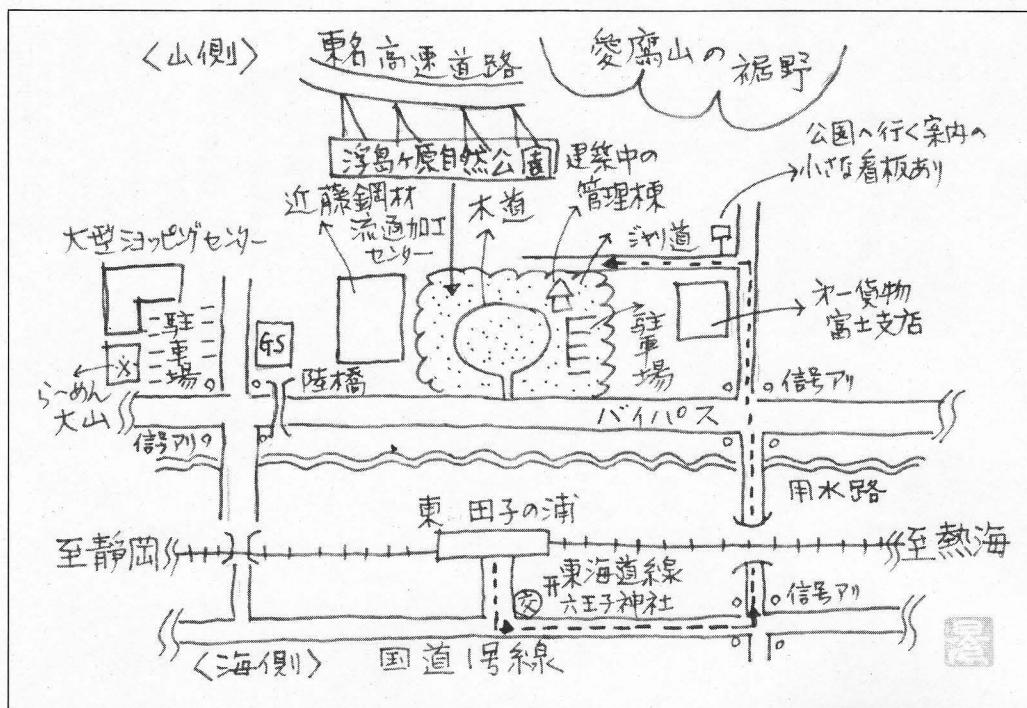
前号『伊能図の楽しみ方体験記』で「広沼」を紹介した。その「広沼（浮島ヶ原）」の面影を残す「浮島ヶ原自然公園」という自然湧水公園が東田子の浦にあるというので、先日、伊豆の大仁へ地域の仲間たちと旅行にでかけたついでに足を伸ばし、広沼の現在の姿を見てきた。

十月六日（超大型台風十八号到来の前々日）、小雨の中藤沢駅発九時四四分の熱海行き電車に乗り込む。熱海から沼津へ、沼津から静岡行きの東海道線鉄道に揺られながら目的駅も近いので、原駅から海側に目を転じると松林の間から海が見え始めてきた。山側は垂れ下がつた雲に覆われて富士山や愛鷹山は見えず、裾野は一面黄金色に色づいた田んぼ、その中に点在する人家等が目にに入った。ほどなく目的地の東田子の浦駅にはお昼直前に到着。ホームの名所案内板には、「浮島沼」「愛鷹山」「庚申塚古墳」「山神古墳」の標記と方角明記があった。改札口は海側に一箇所しかないローカル駅で、駅員に「付近に観光案内所はありますか」と尋ねると、駅員曰く「ありません。少し先に交番があるので聞いてください」とのこと。改札口から外へ出て広い道を二〇〇メートルほど行くと国道一号線に突き当たる。その突き当たりの左角が交番で、若い駐在さんによると、親切な駐在さん曰く「十分ほどで行けます。駅周辺や途中にはありません」。公園の先に大きなショッピングセンターがあり、その中にラーメン屋

があります」とのこと、空腹を我慢しながら一路公園を目指して足を進める。

公園は、東側に第一貨物富士支店、西側には近藤鋼材流通加工センター、南側はバイパスに囲まれた狭い一角にあり、周辺は物流センターや倉庫群が点在しており残念ながら風光明媚とは言いがたし。公園裏口に管理棟が建築中で駐車場も完備しているが、平日、しかも天気が悪いので公園内は我ひとりの貸しきり状態。湿地帯の公園内を一周できる木道がつくれられており、所々に写真や説明文入りの看板が立っている。そのひとつに「浮島ヶ原（筆者注—別名、広沼・浮島沼・富士沼）は、県内はもとより、全国的にみても貴重な湿地である。ヒキノカサ、ノウルシ、サクトラノオなどの貴重な植物やノハナショウブ、ミツハギ、クサレダマなど美しい花が見られる。かつてはミズバショウ、マツバオモダカ、アキナシ、トチカガミ、スブタ、ヒツジグサ等もみられたというが、現在では絶滅したと思われる」とあつた。写真の中で強く印象に残るのは、胸まで浸かりながら田植えをしている風景で、普通の農作業より数倍の重労働であつただろうと、苦労が偲ばれた。狭い水路にはカモ数羽が遊んでおり、その両脇は背丈の高いアシが生い茂っていた。バイパス南側の出入口を出て振り返ると、公園全体を帰化植物セイタカアワダチソウが覆つており、一面黄色の波、また波であった。いまでは間引くこともできないであろう。感傷に浸りながら帰路に着いた。

（おおぬま あきら・マニー&キヤリアマネジメントアドバイザー）



「浮島が原自然公園」 大沼 晃さんが描いたイラストマップ

公園を歩きながら 平家物語の出来事を思いました。

諸行、生滅法。常無滅已、為樂。

環境保育も大変難いことですね。

印ハセイタカアワダチソウを表しています。

〒251-0044

伊能図の時代には風光明媚な名所だった広沼。

今は諸行無常を感じさせる姿となった。

酒造家「伊能三郎右衛門家」

渡辺一郎

しばらくぶりに日比谷の日本生命ビルに用事があつて、帝国ホテルから日比谷の映画街を散歩していて、ビルが一つ無くなつて空き地になつてゐるのに驚いた。

帝国ホテルは毎年NTTのOB会があるので、行くことが多いが、すぐ直前の地下鉄に入る所以で、あまり周りを見ない。銀座で開かれる伊能アトリエの発表会にはたまに行くが、このときも帝国ホテルの横を通り抜けるので、あまりキヨロキヨロするわけではない。

何気なく漫歩していたら、三井銀行本店の隣のビルが無くなつて人口芝を張つた広場になつていた。土一升、金一升の土地にプレハブ小屋を数件建てて、休憩室やコーヒーショップとし、椅子テーブルをして憩いの場となつてゐる。

ビルの谷間の憩いの場提供なら味なことで、丸の内に出来たBRICスクエアの向こうを張つて三井グループが演出したのなら、よしよしとおもつたが、それには少しがれードが低いな。やつぱり資金繰りで建築計画を延期したまでで、いずれはビルに戻るかな、などと余計な詮索を一人でしながら見渡す。

端の方に菊正宗の酒蔵っぽい建屋があるので、覗いて見た。仮設の菊正宗記念館で三百五十年続いているという灘の菊正宗の説明展示が飾つてあつた。カウンターがあつてバータイムと称して生原酒を一杯二百円で売つていた。

つまみが無く酒だけなので、よく効いて少し口が滑らかになつたと

ここで記念館事業部担当という名刺を持った女性に聞いてみた。伊能忠敬を知つてゐるか。勿論知つてゐる。忠敬のことを調べてゐる者が、伊能さんは酒屋だつた。醸造石数一四〇〇石、米搗きまで入れると酒作りの時期には五〇人位働いていたと記録にある。

「お宅は二百年前にお酒を作つていたか。」「勿論です。三五〇年やつてます。」「それなら、一八〇〇年頃は何石くらい作つてゐたの。そのとき現場従業員は何人くらいだつたの。」

「いやー、それは調べてお返事差し上げます。」「話の種に面白いから、なるべく早く教えてよ。」「わかりました」

出口で「ここはいつまでやつてるの？」と聞くと、一ヶ月間の約束で日本酒のPRとしてやつてゐること。期限がきたら全部撤去するという。この頃日本酒の売れ行きが減つてゐるので、巻き返し作戦とか。なお聞くと、現在、菊正宗では本格的な仕込みをする杜氏は三〇人位、「それは少ないね」といたら、工場的にいつも作つてゐる従業員は他に三百人くらいで、年に十万石を作るという。

本格的なお酒はどうやら一割くらいらしい。安い酒は飲んではいけないんだな、と思ひながら電車に乗つたら、灘の菊正宗記念館の館長さんから携帯にかかつてきつた。一八一〇年の酒造石数は四千二百石、伊能家の三倍だ。一八二〇年は八千石、その六年後には一万二千石といふお話で、このときは灘でもトップクラスだつたらしい。

当時、菊正宗では、一蔵千石といつて、一つの蔵は、従業員一五人で千石を作つてゐたという。ただこれには米搗きは含まないとのこと。伊能家の数字は米搗きを含んでゐるので、どう考えたらいいか聞くと、半分以上米搗きでしようとの返事。三〇人米搗きと考へると、醸造は二〇人、大体バランスするようである。

日本酒の立ち飲みから大分脱線し、伊能造り酒屋の研究（？）が進

んだが、伊能家の素顔、測量隊の日常などでは、まだまだ分からぬことが多い。皆様身近なところから研究（？）を初めてみてはいかがでしょうか。

以前に伊能忠敬は長命だったか、というテーマで同時代の有名人の没年を比較をしたら、九州の石川さんが更に詳しく調べていただいたことがあります。

テーマは身近に転がっています。例えば、伊能家の財産三万両といわれているが、どのくらいの金持ちだったのでしょうか。越後屋呉服店とか松坂屋などと比較して番付はどうだったでしょうか。

江戸町人の研究は色々ありますから、すぐわかるでしょう。大金持ち（？）といわれている伊能三郎右衛門家は同世代では何番目だったか、キッコーマンの茂木家と比べたらどうだったかな、など研究テーマとして面白いでしょう。調べた人はいませんから新規性充分です。

年末の持ち越し金八千両と記録がありますが、それって多いのか、少ないのか。また当時のGDPは何万両かな。等々、派生して色々と伊能学は展開します。伊能忠敬を通してみた江戸学でもあります。

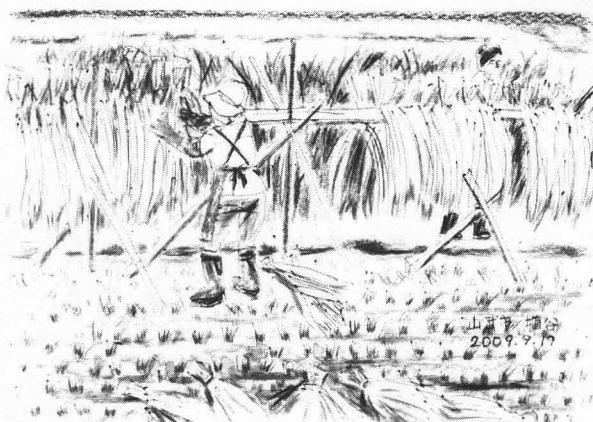
測量隊にしても、歴博の山本教授にいつか言われたことがあります、洗濯はどうしたんでしょうか。日程は一泊のところが大部分です。洗濯をしても乾かすことが出来ません。洗濯物を持って旅行する旅人の絵があるそうですが、洗濯持つて測量はできないでしょう。

二泊するのは十日に一回くらい、これは多分休暇だったと思います。洗濯日にはなり難いのではないでしょうか。

褲などは買えばいいですが、下着など捨ててゆくわけにもいかないでしよう。作業衣も替りがりますね。測量記録をよく読んでいるのですが、そういう記録には出くわさないので。妄言多謝。

（了）

（わたなべ いちろう・名譽代表）



おだ掛け 江口俊子氏・画
山武市埴谷 2009.9.19



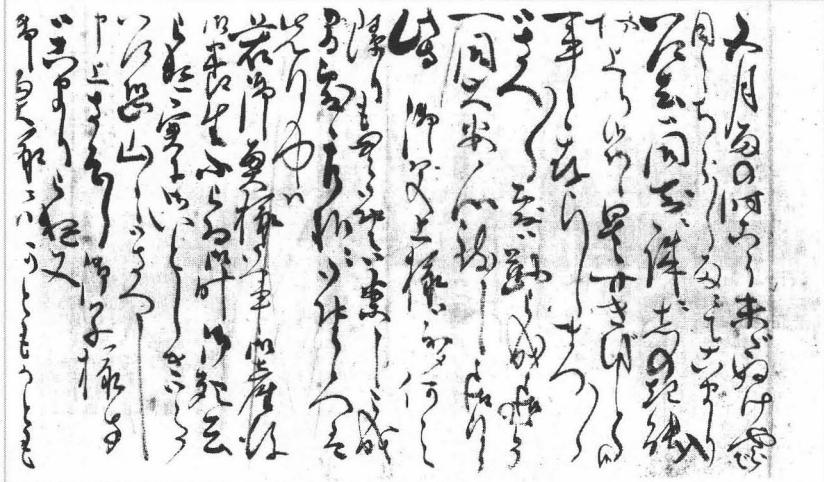
『図説 島原半島の歴史』(限定版)
監修 松尾卓次 (島原史談会会長)
長崎県教科書刊行会発売
郷土出版社発行
定価 11,550円 (要・在庫確認)
長崎県書店商業組合推薦図書

芳名録一番外編

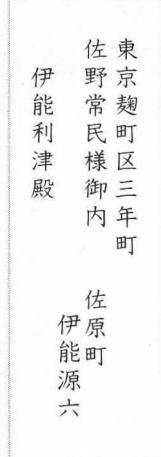
伊能陽子

—佐原伊能家の人々— 佐原の母から東京の娘への手紙

九州支部の馬場会員から佐野常民と伊能家の関係について問い合わせを受け、麹町の佐野家に行儀見習としてお世話をなつていた娘・りつへあてたヒサさんの手紙を思い出した。佐野常民が忠敬の顕彰に力を入れ、曾祖父景文（忠敬から四代目）に声をかけた後のことを思われる。



内封筒



外封筒

東京
佐野様奥にて
伊能おりつ殿
人々用事

同
母より

東京麹町区三年町
佐野常民様御内
佐原町
伊能利津殿

伊能能源六

【原文読み下し・注釈 伊藤栄子氏】
五月雨の時こう未だぬけやらで
日々ちら／＼雨二でこまり入、
乍去御同前ニ誠ニしのき能
切上り候ハ、暑サキビしく候
事と存まいらせ候 まつ／＼

御一さへ／＼敷御勤被成居候御事
一同大安心致し居候べく候
此方御父上様御初メ何之
障りも無御坐、御案し被成
間敷候 左様ニ御坐候へは
先月中ハ

若御奥様御事、御産後

御養生不被為御叶、御死去
被遊實に御いとしき御事
乍恐山々御さうし

申上 さそ／＼御子様方

御こまり被遊、又

御奥様ニ何ともかども

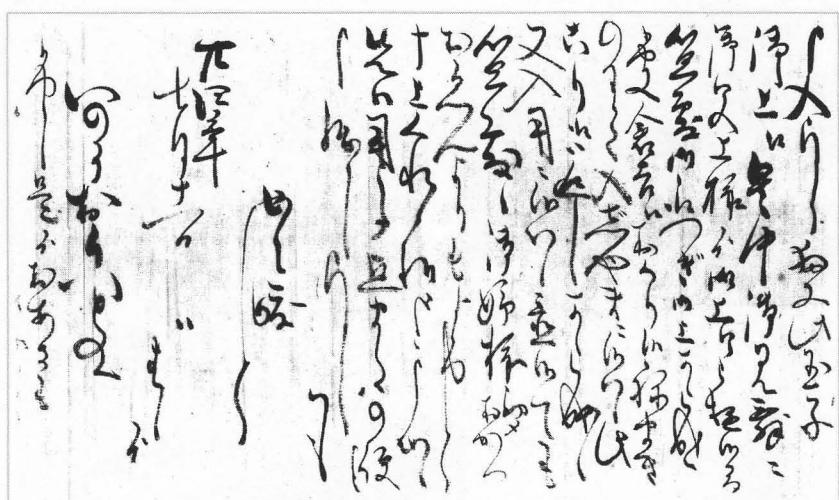
御入御さうし申上居候カ

御力御おどしこて御不便

様ニ被為入候御事、此程ハ何かよまニ

候御事哉 御伺申上度存上候

尚又先日申こしのぼう
じま早速おり仕立おり申
不出来ニ候へ共、御ふしゆう被成候
大いそきにて倉吉舟へ頼申し
出舟致し、其跡江ゆう便参り



*伊能ヒサ（一八三七～一九一四年）
景文の後妻、五代目こう以下五姉妹
の母（りつは三女）。江戸城にご奉公し
ていたと聞く。彼女の打掛は伊能家か
ら嫁ぐ者が代々着用してきた。

御申しこしの通り又々わた入ヲ
入おり候へ共、右品ニテハ五ほ
はいしうの前も見にくき
淨ヒタチ申す中、浮足音
浮足音を存シテ候
此六かいまきヲ仕立饋シテ候間
御請取可被成候 古きひとへ物ヲ
かさねかけ可被成候 扱ハシまた
此節ハ七だいいかハ候哉 一同大
二心配致し居候 又あかきれ
は此程はもはやなをり候
哉 委敷うけたまり度存候
山々案し居候 夫ニ丸薬ヲ
二十五りう（粒）つ、と申入候へくも母
が毎夜のみ候のに、其数ニテハ少々
過るやうニ存、あまり下り過ると
存候へ、かけ引シ致しのミ
可被成候 わすれなく毎夜／＼
おこたりなくのミ被成候 尚又
玉子も壱ツニてすぐなくと
思ひ候ハニツツたへ候様に
可被成候 大事ニ養生干（専）一二
被成、御勤可被成候 御奉公中ニテ
さそ／＼こまり候事と山々
申入まいらせ候 扱又此玉子
御上江暑中御見舞二
御父上様より御上ハシ被遊候間、
宜敷御取つぎ御上可被成候
又さむい夜も有之候と存
母とおかつと兩人ニテ大いそきニテ
此九かいまきヲ仕立饋シテ候間
御請取可被成候 古きひとへ物ヲ
かさねかけ可被成候 扱ハシまた
此節ハ十だいいかハ候哉 一同大
二心配致し居候 又あかきれ
は此程はもはやなをり候
哉 委敷うけたまり度存候
山々案し居候 夫ニ丸薬ヲ
二十五りう（粒）つ、と申入候へくも母
が毎夜のみ候のに、其数ニテハ少々
過るやうニ存、あまり下り過ると
存候へ、かけ引シ致しのミ
可被成候 わすれなく毎夜／＼
おこたりなくのミ被成候 尚又
玉子も壱ツニてすぐなくと
思ひ候ハニツツたへ候様に
可被成候 大事ニ養生干（専）一二
被成、御勤可被成候 御奉公中ニテ
さそ／＼こまり候事と山々
申入まいらせ候 扱又此玉子
御上江暑中御見舞二
御父上様より御上ハシ被遊候間、
宜敷御取つぎ御上可被成候
又さむい夜も有之候と存

尚又倉吉江おり候ねまき
のわた入、じやまニ候ハハ此
こり江御返し可被成候
又入用ニ候ハハ置候ても
宜敷候 御姉様初メおかつ
おゑんよりもよろしく
申上くれ候様ニと申出候
先ハ用事迄またの便と
申し残しまいらせ候 以上
めて度 かしく
二十四年 七月十一日 同
いのうおりつ殿
尚々是よりおあさも
はけしく相成、御切かく
大切ニ御いとみ／＼被成
御勤可被成候 以上
いとしき さえざえ
ばうじま すがすがしい
ふしゆう いたわしい
不自由 棒島（縞）布のがら
かいまき 朋輩衆
行李 綿入れの夜着
荷物いれ

(いのうようこ・伊能忠敬研究会顧問)

研究レポート『伊能忠敬』(八) *(五)重複のため(八)とします。

忠敬の見た風景（その二）

石谷春香

ここから東海道に入ります。大きな通りを行きます。
国府津駅を通り過ぎます。

二日目 八月六日 晴れ

今日は江の島まで行き
ます。

六時半に起きて、一階のと
ころでロールパンを
二つ食べました。

七時に出発です。

朝日が結構まぶしいです。



少し行くと日本
橋から 78 キロ
メートルという
標識があります。



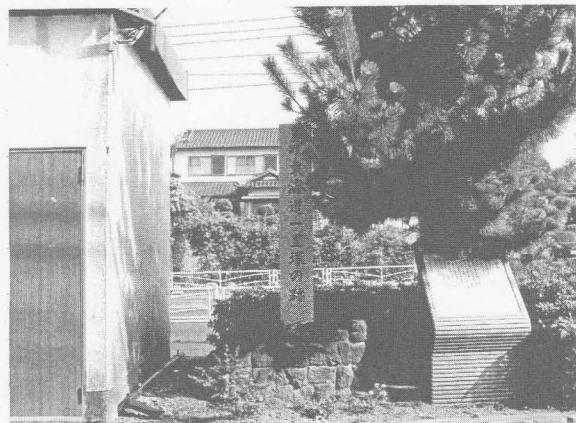
川ぞいに行きます。
森戸川の親木橋を
渡ります。

さらに行くと二
宮町の標識があり
ます。

8 二宮町

二宮町に入つて、押切川の押切橋を渡ります。

二宮駅を通り過ぎます。



このあたりの東海道押切坂付近は「かながわの古道50選」に選ばれています。さらに行くと東海道一里塚の跡の碑があります。東海道には一里ごとに碑がありましたが、ここは江戸から18番目の一里塚です。

サンクスに寄つてアイスを食べました。
「湘南かき氷バー」があります。



さらに行くと松並木がみえてきます。
一六〇四年（慶長九年）に松が植えられました。
このあたりは「かながわの古道50選」に選ばれています。

9 大磯町

しばらく行くと、大磯町の標識があります。



不動川にかかる新不動橋を渡ります。
橋には大磯ロングビーチの看板もあります。

「湘南」という
言葉はここから
生まれました。



江の島の標識がありま
す。あと一六kmです。
長いまっすぐな道をす
っと行きます。



松並木の道を行くと
「鳴立庵」があります。
そこは「かながわの建
築物一〇〇選」に選ば
れています。三〇〇年
にわたる俳句の道場で
す。入場料は五〇円で



スリーエフによつて水を買います。

スリーエフ
本店 089-61-4051

様 告 証 様
2007年 8月 6日 (月) 0:02
09:179-471245 X341
9-9291-13406 ￥1.26
お詫び PET1L ￥2.06
合 計 ￥5.74
内訳書 ￥2.74
現 計 ￥5.74
お 扱 ￥5.00
お ￥4.426

運賃りの後店で貰へて、度々後まが
書はしい媛さんとお話しした事に丁寧に
特徴的なお手紙を頂きました。おまけに
おつまみの美味しいお煎餅ださうさ
<http://www.three-f.co.jp/>

登録者数ループ
新規登録中!
ハーベン実業社
新規登録

このあたりの東海
道大磯宿は、宿場町
として以前は大変
な賑わいを見せま
した。

さらに進みます。道の左側を行きます。ずっと進んでいくと橋に着きましたが行き止まりになってしまいます！車がすごい勢いで走つて行きます。どうしようかと思つていたら、サイクリングの人人が通つたので聞いてみました。そしたら「反対側に歩道がありますよ」と教えてくれました。少し引き返して反対側に行きました。そうすると、歩道がありました。ここは相模川の湘南大橋です。



さ
ら
に
進
み
ま
す。
道
の
左
側
を
行
き
ま
す。
ず
つ
と
進
ん
で
い
く
と
橋
に
着
き
ま
し
た
が
行
き
止
ま
り
に
な
っ
て
し
ま
い
ま
す！
車
が
す
ご
い
勢
い
で
走
つ
て
行
き
ま
す。
ど
う
し
よ
う
か
と
思
つ
て
い
た
ら
、
サ
イ
ク
リ
ン
グ
の
人
が
通
つ
た
の
で
聞
いて
み
ま
し
た。
そ
し
た
ら
「
反
対
側
に
歩
道
が
あ
り
ま
す
よ
」
と
教
え
て
く
れ
ま
し
た。
少
し
引
き
返
し
て
反
対
側
に
行
き
ま
し
た。
そ
う
す
れ
ど、
歩
道
が
あ
り
ま
し
た。
こ
こ
は
相
模
川
の
湘
南
大
橋
で
す。



金日（花火）川の花水川橋を渡ります。
とても景色がいいです。
この橋は「かながわの橋一〇〇選」に選ばれています。
平塚は七月七日の七夕まつりはとても有名で、「かながわ未来遺産一〇〇」に選ばれています。



橋からの景色もとてもきれいです。
湘南大橋は「かながわの橋一〇〇選」に選ばれています。



とてもとても長い橋です。



橋を渡るとすぐに茅
ヶ崎市の標識があり
ます。
道は走りやすいで
す。



走って、走ります。· · · ·

ところどころ道に砂があり、走りにくい所があります。

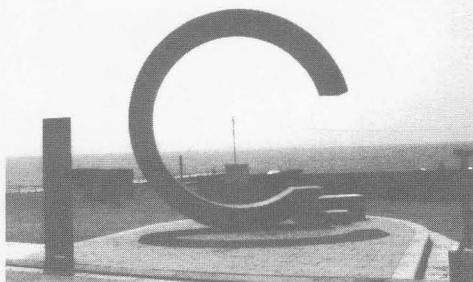
走ります · · ·
まつすぐ · · ·
そして · · · ·

自転車を止めてしまいました。なんだか走るのが、いやになつてきま
した。もう走れない · · ·

走つていきます。

少し走つて右に入ります。そこから「サイクリングロード」
になります。「サイクリングロード」はすぐ海の近くを通つ
ています。

前を見ると、道はずーっと続いています。
・・・・。でもここから家に帰ることもできない・・・・。
休みます・・・。自転車を止めて海岸に出ます。
なぜかだれもいません。なんだか気持がいいです。
そういえば最初にルールを決めていました。
ルールその3 あきらめない。ここであきらめたらなんだかいやです。
まだ走れる！お休みはここまで！走ります！まっすぐ！



海の家が
いくつもあります。

ずっと行くと
「ザザンビーチち
がさき」に着きま
す。
「茅ヶ崎ザザン
C」は、茅ヶ崎の
頭文字の「C」を
デザインしていま
す。



正面には「鳥帽子岩」が見えます。

ここは「神奈川の未来遺産100」に選ばれています。

そして江の島が見えています。
まだ遠そうです。



海の家でちょ
っと休みます。

右側にある湘南海岸公園は「かながわの公園50選」に選ばれています。

かわいい建物のマック
があります。



さらに行くとサイクリングコースが終わりました。引地川の鵠沼橋を渡ります。
江の島がだいぶ大きくなります。

江の島大橋を渡ります。橋は
「かながわの橋一〇〇選」に
選ばれています。橋の長さは
三八九メートルになります。
そしてとうとう江の島に到
着です！

境川の片瀬橋を渡り、いよい
よ江の島です！このあたり
は「かながわの古道50選」に
選ばれています。



途中からエスカレ
ーターに乗りま
す。何回か乗りま
す。

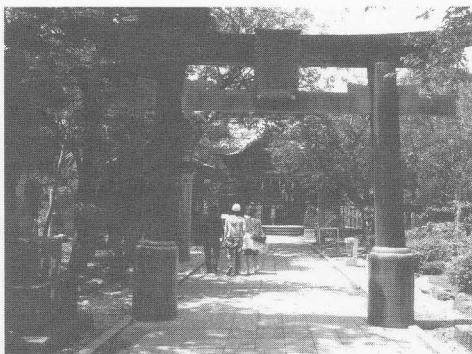


さらに進みます。
「新江の島水族
館」があります。



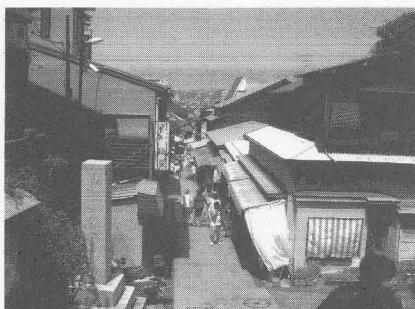
最初に泊まるところ
に行くことにしま
す。おみやげやがた
くさんあります。

江の島は「かなが
わの未来遺産一〇
〇」に選ばれてい
ます。橋を渡つた
ところにたくさん
の自転車が止まつ
ていたので、そこ
に止めました。

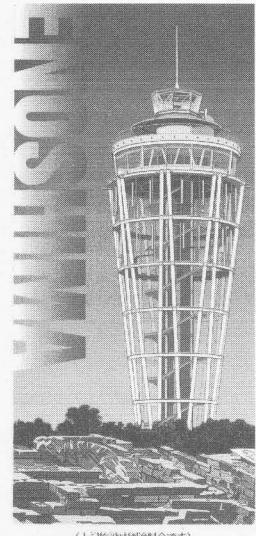


江の島のさらに奥に進みます。江の島奥津宮があります。ここは三つある江の島神社の一つです。

さつき通つてきたおみやげやさんをみに行きました。近道があるのでそこからいきます。階段があつて、急な坂路がありまます。しばらく行くとさつきのおみやげやさんとのところに出ます。



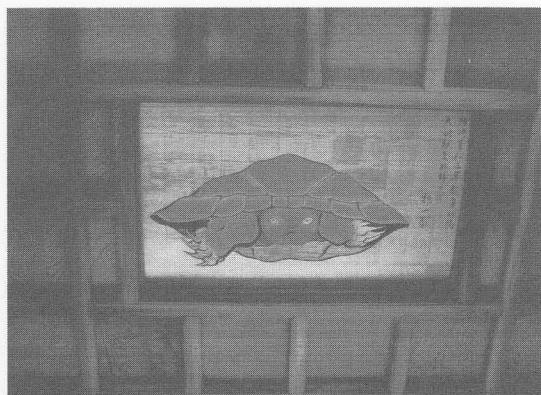
最後まで乗つてそこから歩きます。そしてようやく着きました。民宿、海上亭です。しかし中に入つてもだれもいません。
「すいませーん！」となんどか言うと、ようやく民宿の人が出でてきました。しかし民宿の人は「ごめんなさい。まだ部屋の用意ができないんです。」と言いました。しかたないので荷物だけ預けて、お昼を食べに行くことにしました。



17. -8. -6
エスカーレ利用券

八方睨みの亀の絵があります。どこから見てもこちらをにらんでいます。

あるお店に入つてラーメンを食べました。窓からの景色がとてもきれいです。走つてきたところが遠くに見えます。



おせんべいやさんでおせんべいを何枚か買います。つめたいむぎ茶をだしてくれました。おつりも「四五〇万円です！」と、おもしろいです（このおじさんには、あとでとても助けられます）。



その時自転車の話をしました。すると「自転車はあそこには止めない方がいいです。いたずらとかされてしましますよ。」と教えてくれました。「自転車はここまで運んできたほうが安全ですよ。」と言つてくれたので運ぶことにしました。

民宿に行くと私の名前が出ていました。

お土産を買います。最後の工
スカレーターを上つたところ
で、ちょっと休みました。



おじさんは「おかえりなさい！」と言いました。会計のときやつぱり「おつり一一〇万円ね！」と言つていました。そのとき自転車の話をしました。

すると「上まで自転車は持つていけないよ！ないしょだけど、江の島の人間だけが使つている駐輪場を教えてあげる。」と言つてくれました。助かりました。

それから波打ち際ですこし遊びました。

しかしここは江の島の一一番高いところで、ここに来るまでエスカレーターで何度も上ってこなければなりません。自転車を押して上がるとなると、階段も持ち上げていかなければなりません。困りました……さつきのおせんべいやさんに来たとき、もつと買うことにしました。

おじさんは「おかえりなさい！」

と言いました。

「おつり一一〇万円ね！」と言つていました。そのとき自転車の話をし

ました。

隣のテーブルに小学生の男の子とお父さんが来ました。最初はだまつていたのですが、だんだん話をするようになりました。すると「今まで自転車は持つていけないよ！ないしょだけど、江の島の人間だけが使つている駐輪場を教えてあげる。」と言つてくれました。同じようなことをする人がいるんだなと思いました。今日は四〇kmも走ったそうです。男の子はずつとだまつっていました。部屋に帰つて私のメーターを見る

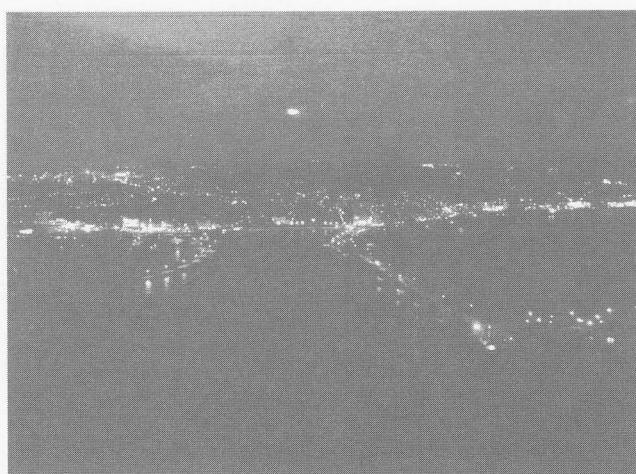
と、湯河原からスタートして六二・九〇kmでした。

私は二日でそんなの
で、男の子はすごい
と思います。



湘南名物の生しらすも出ました。
夕食、六時からでした。食堂の窓から海がよく見えます。風がす
くさいです。

夜に近くの江の島「サムエル・コッキング苑」に行きました。イギリスの貿易商サムエル・コッキングが造った庭園です。



それから江の島展望台を登りました。塔の高さ、四六・八mになります。展望台からの景色はとてもきれいです。

それからわたしの泊まる部屋の中まで見えました。

つづく

(いしや はるか・文教大学付属高等学校一年)



柏木家に残された忠敬資料（四）

柏木 隆雄

写楽の肉筆による扇面画が、江戸東京博物館に展示され話題となつた。日本の美術関係者がギリシャのマノスコレクションの中から見つけ出したもので、この絵の発見により、謎の画家・写楽の謎がまた一

つ増えたという代物である。ほかにも百点余りの江戸版画が展示され、摺り具合いなど状態のよいものが多く、中味の濃い催し物であった。ギリシャの外交官のグレゴリアス・マノスがジャボニズム人気に沸くパリやワインで購い集めたとのことである。

展示物の流れは、狩野派の大和絵、数点に続いて、江戸初期浮世絵の鳥居清長、奥村政信。中期では鈴木春信、勝川春草、歌麿など。写楽のものも「市川男女藏の奴一平」ともう一枚あつた。後期になると、歌川派の豊国、国貞、国芳、広重、それに北斎。代表作の「富嶽三十六景」から「凱風快晴」。これらの展示の中に司馬江漢の筆になるものが三点あつた。多才な司馬江漢の履歴の中でも異才の浮世絵の下絵作家「春重」。鈴木春信門下、師の亡きあと、二代目春信を名乗つたことがあり、春信の落款のある三枚の絵も、作風が類似しているので、江漢の筆によるものでは、という疑いを持つてしまつた。

江漢の画才は、浮世絵界の一下絵作家から、その驚くべき探究心によって開拓した銅版画、洋画、油絵、蘭学、医学、自然科学等、多岐の分野でその才能が發揮されることになる。

地理、天文学にまで及んだあくなき探究心と考察力から生れた成果の一つが、これから述べる『地球全図略説』の書である。

七、司馬江漢の『地球全図略説』

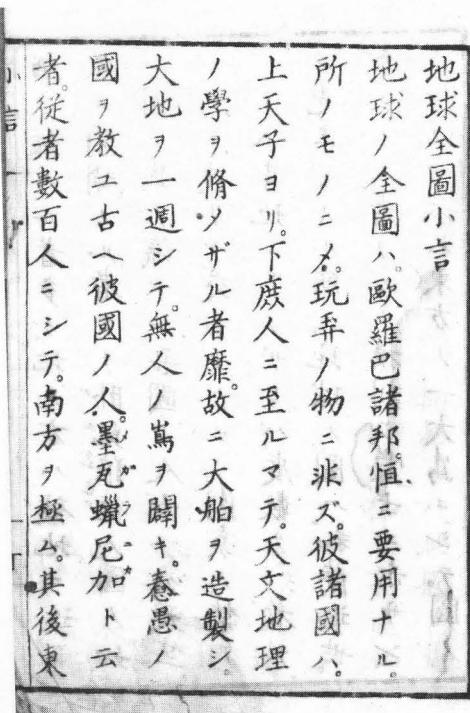
「東都 江漢司馬峻著、」で始まるこの解説書には前文が二つあつて、冒頭五頁に及ぶ「題地球全図」（資料⑯）。もう一つは「地球全図小言」（資料⑰）と題した解説の付記みたいなもの。「題地球全図」は漢文で書かれており、本文の最後に、寛政壬子冬、磐水平茂質撰となり、寛政四年冬に書かれた大槻玄沢の序文であることを示している。雅号の左横には「茂質」の角印も押されている。

題地図全図

君嶽江漢氏、素善丹青、兼好技巧、嘗慕荷蘭之馨、彼之所舶琦器図画之類、摸倣擬製者不為尠、蓋荷蘭之國、工手諸技、画図之写真、器械之使用、至精至巧、令人○視、君嶽嘗読其書、欲伝其法、就余切磋之、往歲、欲考究、彼邦銅版鏤刻之法、乃問余其説、以造意之、創製銅鏤以示諸世、觀者無不感賞、近者思鏤彼邦所製坤輿之全図、因請余所藏西刻之一幅、而摸写之欲以上銅謀諸余、ゝ曰、曩月池桂君有此舉、校譬諸図業已脱稿、余亦与焉、足下舍諸、君嶽曰、彼則「梓也」此則銅也、請試製之、頃者其図新成、將請余言以題其図、余披以觀之、則其画線明、而悉其彫鏤工、而精殆不恥西刻、可謂尽心焉耳矣、惜哉、全圖狭小、而邦国地形之参差、各州及諸島之名号等、多所闕略、請足下再加訂正、君嶽曰、尽其精探其蹟、則其人在焉、若我、邦之人固暗地輿之事、唯僅識海外之国加蠶天竺阿蘭陀等之名、而鮮知其全州之大者、可謂蒙昧太甚也、余今製此図也、皆循西図雖未尽其詳審、然已足知其梗概、夫万国之广邈、得使人知其大体、則余之素願足矣、余曰、「善矣、其於欲發人之矇、亦非無裨益、因懲漁公諸世、

寛政壬子之冬

印（茂 質）
磐水平茂質撰



資料⑯ 「地球全圖小言」



資料⑮ 「題地球全圖」

地球全圖小言

地球ノ全図ハ。歐羅巴諸邦。恒ニ要用ナル。所ノモノニシテ。玩弄ノ物ニ非ズ。彼諸国ハ。上天子ヨリ下庶人ニ至ルマテ。天文地理ノ学ヲ脩メザル者靡。故ニ大舶ヲ造製シ。大地ヲ一週シテ。無人ノ島ヲ闢キ。眷愚ノ国ヲ教ユ。古ヘ彼國ノ人。墨瓦蝶尼加ト云者。メガラニカ従者数百人ニシテ。南方ヲ極ム。其の後東タルシランド西ヲ極ムル者多シ。北ノ方ハ彼地ニ近シ。故ニ開闢スル者アリ。臥兒狼德ノ国ノ如シ。図ヲ見テ識ベシ。吾國ノ人。古ヘハ天竺海鳥ニ渡リテ。交易ヲナセリ。國家ノ禁アリテ。今其ノ地ニ至ラザレバ。度數ヲ知者ナシ。先生製スル所ノ。地球ノ図ハ。和蘭近世。改メ正ス者以テ摸刻シ。蒙士ニ示サント欲ス。日本ハ東方ノ一大島ニシテ。國ノ廻り海ニシテ。万國ノ船。稀ニハ此國ノ。海岸ニ近ツク者アリト雖モ。言語文字通ゼザレバ。之ヲ弁別スルコト能ズ。彼邦遐シト雖モ。天竺ノ海鳥。恒ニ大舶ヲ通シテ。屬スル者多シ。日本ヲ去ルコト。南ノ方六七百里ニ過ズ。故ニ彼諸国ノ漂船。來ルコトアラバ。此図ヲ出シ。示サンニ。立トコロニテ指シ別タワカン。諸侯方ノ酋長ナドハ。」所持シ玉ハゞ。不虞ニ備ルノ。一助トモナランカ。

寛政九丁巳春二月吉旦

塾從等誌

漢字まじり片かな文「小言」は、江漢自身の書いたもの、末尾の「塾從」は「塾徒」の誤りであると解題の記載がある。忠敬資料（資料⑯）にはこの「小言」が入っており、増補版ということになる。

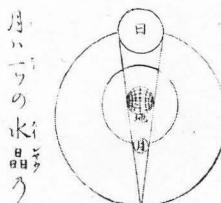
本題の『地球全図略説』の書き出しの部分は、この書物を刊行する江漢の趣旨、意図の説明である。文意は次のようになろうか。

「私（江漢）は、絵画製作の余暇に、オランダから到来の珍しい器物や絵画を複製し、また彼の国の銅版の技術を習得した。それにより諸々の図を新製して、知り得たことを他の人々にも知らしてあげたい。さらに、その技法をもつて万国図を製作することを思い立ち、諸国の地図等を探索して入手し、それを複写し銅版に写刻する。もともとわが国人の多くの人は、世界の諸国の事を知らない。ゆくゆくはそれの人々が、この図を見て、万国の大きさを知ることになる。ぜひそうなつて欲しい。精詳なことは、自分自身も識者の校訂を待つものである。同じ思いの学徒に少しでも役に立てば喜ばしい。という些少の志である。故に、この略説を以つて、それらの図と照らし合せて見れば、この略説が多少の便利になるだろう。」

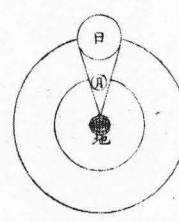
文章は続くが、以下は江漢が本意であるところの『地球全図略説』、地理、天文学の分野の記述となる。

れを掲載する。

カツナカバ
ココ
チキウ
リツツク
トツ爰に
ドスカ
て度数をしめす」（資料17(18)）



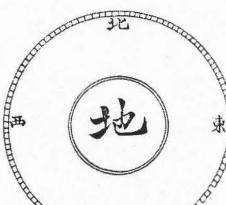
卷之三



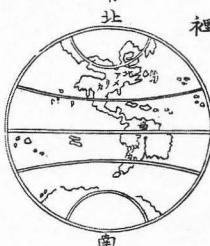
資料⑯



資料 18



資料⑯



- 44 -

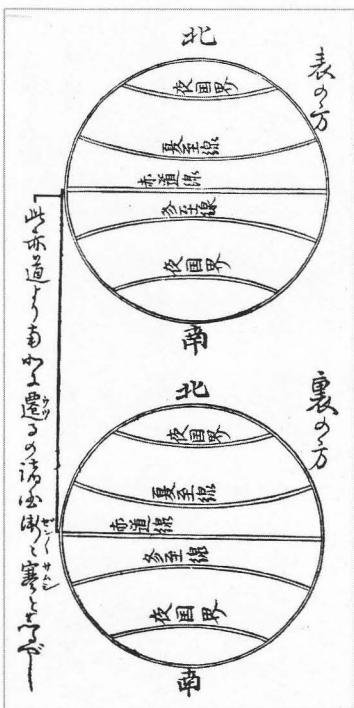
江漢の解説は実に判り易い。市井人向けの言葉遣いである。今ならば中学生の理科、社会科の教科書である。

略説の後半は、地理・風土に関する記述となる。地球を南北、表裏に区分し、春分・秋分・夏至・冬至の仕組み、気候、寒暖の違いを、地域や地名を挙げて説明している。江漢自身の長崎行の体験を語り、文章に具体性を持たせている箇所もある。

○表の方 裏の方 此赤道より南北に遷るの諸国漸々寒とするべし
アメリカ大洲も此日本の裏にあたりたる国にて、此土の寒暖も表の如く、赤道直下ハ常に熱し、赤道南北によりてハ漸々寒、此諸国ハエウロッパ諸州の人渡て開し國多し。

○日本國の如きハ赤道を三十五六度去の地にして、寒暖時に隨ひて異なり、支那の南京ハ日本の肥州と同し、北京ハ奥州」蝦夷にひとしく、かくの如くにしてエウロッパ諸州の寒暖、此度の線を推て知べし。

○此界より北の方日輪の及ばざるの地にして、夜国冰海と云、春分のころより早天の如く、夏至に至てハ昼をなす、此時に漸日光を纔に見る、然とも日上に旋らず地に就て周転、秋分のころハ則日暮にして日



資料⑩

地下に入、冬至の比ハ夜の子の刻のごとし、春分に至るまで夜をなす、此国近ころはエウロッパの諸州の人開て、鯨獵をして産業とす、ウニコールも則此海の産なり、北極直下の地にして亦南極の方も是と同じ」（資料⑪）

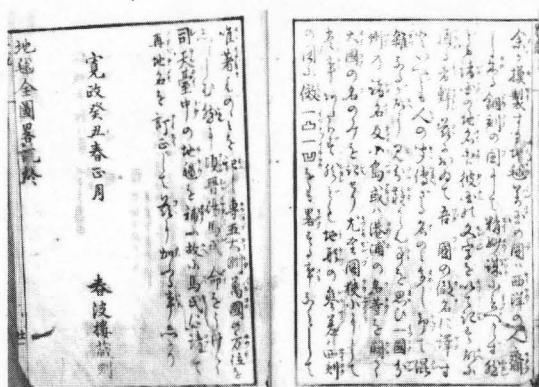
「地球全図略説」の中から所々を割愛しながら諸説を引用してきたが、最後に最終頁を掲載してこの項の終りとする。（資料⑫）

「余が摸製する地毯万國の図ハ、西洋の人齋し来る銅刻の図にして、精妙誠に云ふべからず、然ども諸國の地名等ハ彼國の文字を以て記す故に、通る者鮮、茲

におむて吾國の仮名に訳すといへども人の聞伝ざる名のミ多し、却て混雜なるが故に見分難からん事思ひ、一國分州の諸名及小島、或ハ港浦の名等を闕て大国の名のみを記せり、尤全図狭小にして尽事あたはず、然ども地形の參差ハ西刻の図に倣、一凸一凹をも略する事なくして、」唯著ものゝミを記し、専五大洲万國の方位をしらしむ、然に頃晋陽馬氏命をうけて、天文館中の地毯を補ふ、故に馬氏に請て、再地名を訂正して、茲に加ふる事しかり」

寛政癸丑正月
地球全図略説終

春波樓藏刻



八、江漢と忠敬

司馬江漢と伊能忠敬は没年（一八一八）が同じ。江漢の享年は八十歳もあるが、七十二歳が正しいよう、一七四七年の生まれ。忠敬より二歳の年下で、二人は同年代。同じ時世を共有していた。

江漢は江戸で生まれ、幼少より絵を描くことを得意とした。『春波樓筆記』によると、刀工か金工になりたかつたと書いてある。『和蘭天説』の跋文に「幼少より市井に長じ、幼い時、野に出て昆蟲類の動態に喜びを感じ、家に持帰つて寝ずに觀察した」とある。江漢は生来、自負心と名譽欲が強かつたようだ。忠敬にも幼児期から聰明だったことの伝説がある。忠敬自身の書き付け（娘の妙薫に与えた書翰）も中にも

「自分は幼いころから高名出世を好んだ」とある。

忠敬の業績は「刻苦勉励」の成果とみるが、江漢は「才氣煥發」によるものと思う。忠敬は江戸に二十余年、測量一途に凝縮した努力の結果が今日の日本の姿、形を明確にした実測による日本輿地全図となつた。

江漢は生まれながらの江戸っ子。居ながらにして江戸から地方に至るまでの情報を得ており、幅広い交友関係から海外の文化・文明まで享受できる立場にあつた。江漢の凄いのは美術、蘭学、天文学に至るまで関わった全ての分野で超一流だったこと。幼時には好んで生物、生体の觀察とその考察力が全ての業績の下地となつているように思う。

江漢と忠敬の関わりを『忠敬日記』に見る。第五次測量出立の日、文化二年二月二十五日、「——品川まで送別しける人々は、小林勝蔵、松野茂左衛門、司馬江漢、伊能三郎右衛門、会田算左衛門、大川治兵衛、松田幸太郎、天満屋八右衛門なり。品川宿にて中飯す。松野茂左衛門は同所より帰る。小林勝蔵は大井村より帰る。伊能三郎右衛門、大川治兵衛、天満屋八右衛門も同大井村迄送別なり。暮に川崎宿に着。

測量は六郷川向にて止。此夜晴天測量。会田算左衛門、司馬江漢、両人此所迄送り翌朝帰る。品川宿より当宿へ二里半。」「江戸日記」ではもう一個所、江漢名の記載がある。「文化六年四月九日、朝より晴。司馬江漢来る。」

「地球全図略説」が刊行されたのは寛政五年、この年、忠敬はまだ佐原に在つた。隠居する前年に当り、家業に励んでいた。江戸に出たのは寛政七年（一七九五）、翌八年に高橋至時に師事する。略説の増補版が刊行されたのが寛政九年、この年、白昼に金星の南中を観測したと年譜にあり、識者の間では江漢の地球図関連図書も話題となつていたと思う。

忠敬もこの増補版をいち早く入手したと思われる。佐久間達夫氏が整理・編集した忠敬の藏書、約五千冊の中に天文に関するものは意外に少ない。「天經或問」「天學指要」「天文圖解」「地球一覽図」など。柏木家に残された資料の「地球全図略説」はその中に含まれていない。藏書の中の「地球一覽図」一幅、とあるのは、次号で記述予定の、天明三年刊、三橋釣客の「地球一覽図」と同じものなのかはまだ知り得ていない。

忠敬の測量開始から遡ること三十年、明和七年（一七七〇）に江漢の浮世絵師の師・鈴木春信が病没し、江漢に転機が訪れた。師を変え、朋輩を変え、江戸系洋画の祖・秋田蘭画の平賀源内、小田野直武等との交際を持つ。この人脈は、後に、前野良沢、杉田玄白、大槻玄沢等の蘭学者との知己につながる。

一方、遅れて知性集團の第一線に登場した忠敬は、江漢の人脈を利用しながらも、近藤重蔵、江川太郎左衛門等とも交接し、その律儀・実直な性格により交際を深めていった。

松平定信のような要人の非難を受け、友人からも疎ましく思われる
ことが多くなった司馬江漢は、厭世虚無的な思想をもつようになる。
忠敬との性格の違いが、二人の晩年の境遇を変えてしまった。

最後に、江漢の「和蘭天説」から「象限儀之図」（資料②）を挙げ
ておく。忠敬は、江漢の舶来知識と天体宇宙への深い造詣にすいぶん
助けられたと思う。

（かしわぎ　たかお・税理士・作詞家）

【柏木家資料】

『地球全図略説』

司馬江漢著

国立歴史民俗博物館所蔵

歴博への寄託者

香取市佐原

柏木俊一

写真撮影

成田市

佐藤　勲

【参考資料】

『司馬江漢全集』八坂書房

『司馬江漢　百科事典』

神戸市立博物館企画展図録

『小田野直武と司馬江漢』美術史学会第七〇号 成瀬不二雄他

『司馬江漢のミクロコスモス論』二宮陸雄著『医学史探訪』

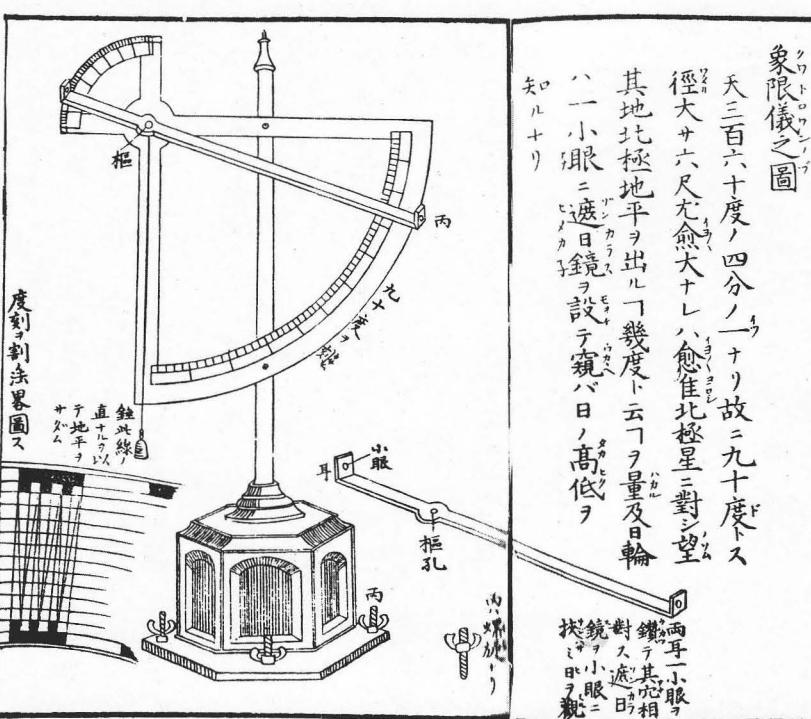
『司馬江漢』新潮社 神戸市立博物館 岡 泰正

『伊能忠敬日記』

佐久間達夫編

【次号予告】

・『地球一覧図』（木版手彩色）天明三年刊



梵天を立てた所は三十万から四十万箇所

伊能忠敬測量隊の全國測量

佐久間 達夫

伊能忠敬測量隊が、十七年の歳月と十回に分けて、日本全国の沿海・街道・島嶼・湖沼を実測し、その資料を基にして、始めに作成したのが、縮尺三万六千分の一の「伊能大図の下絵図」である。

「伊能大図の下絵図」を広げると、まず眼につくのは、測線上に「ミリメートル」程の点が数多くついていることである。これは、測線に沿つて梵天を立てた場所であり、伊能測量隊は、梵天と梵天の二点間の距離と方位を測定し、それを地図上に記し、下絵図を作つたのである。

筆者が、香取市佐原の伊能忠敬記念館に勤務していた時、參觀にこられた小学生から「伊能測量隊は、梵天を何箇所くらい立てたのですか」と、よく聞かれた。そのときは、調査をしていなかつたので、「梵天の数は、調べていないので、正確な数値はわからないが、測量距離を四万キロメートルとして、百メートル間隔に梵天を立てたとすると、四十万箇所になるかな」と予想値をいっていた。

資料一 第九次伊豆七島・富士山麓付近測量日記	
佐久間達夫	校訂
・自伊豆国下田町至熱海村	
・文化十二年十一月二十日 晴天、午中頃下田町出立。稻生沢川舟渡し、岡方村、柿崎村、白浜村、繩地村、谷津村、浜村に至る。すべて海岸付山越三里、七ツ時過、止宿百姓斎賀屋十兵衛、名主幸左衛門。	
一一月二一日 浜村逗留	
一一月二二日 浜村逗留	(以下、出立・逗留のみ記述)
一一月二三日 浜村逗留	
一一月二十四日 浜村出立 稲取村止宿	
一一月二十五日 稲取村出立 片瀬村止宿	
一一月二六日 片瀬村出立 大川村止宿	
一一月二七日 大川村出立 八幡野村止宿	
一一月二八日 八幡野村逗留	
一一月二九日 八幡野村逗留	

から、沿海測量は「伊豆國熱海村より伊豆東海岸を下田町まで」を、街道測量は「筑前國黒崎駅より長崎街道を山家宿まで」を、島嶼測量は「伊豆國三宅島」を、それぞれ選定した。

また、測量距離は、「伊能忠敬測量日記」と、文政四年に幕府に上呈した「大日本沿海実測録」、それに保柳睦美編著の『伊能忠敬の科学的業績』(古今書院)のなかの「伊能隊の測量旅行距離」を引用した。

一 梵天数	一一四ヶ所	実長	三里一八町三九間
二 二月二日	八幡野村逗留	富戸村釜屋浜	富戸村釜屋浜
二 二月三日	富戸村出立	富戸村止宿	梵天数
二 二月四日	富戸村逗留	川奈村出立	川奈村止宿
二 二月五日	川奈村逗留	和田村出立	和田村止宿
二 二月六日	和田村逗留	和田村止宿	片瀬村
二 二月七日	和田村逗留	和田村止宿	梵天数
二 二月八日	和田村出立（大仁街道測量）	徳永村止宿	梵天数
二 二月九日	徳永村出立（大仁街道測量）	柏久保村止宿	梵天数
二 二月一〇日	柏久保村出立（大仁街道測量）	城村止宿	梵天数
二 二月一一日	城村出立（大仁街道測量）	和田村止宿	稻取村
二 二月一二日	和田村出立	宇佐美村止宿	梵天数
二 二月一三日	宇佐美村出立	網代村止宿	浜村
二 二月一四日	網代村出立	熱海村止宿	一 梵天数
二 二月一五日・一六日	熱海村止宿		四〇ヶ所
熱海村			二二四ヶ所
一 梵天数	八四ヶ所	実長	実長
一 網代村	八四ヶ所	実長	二里一七町一二間半
宇佐美村	三一ヶ所	実長	一里二七町二七間
一 梵天数	六三ヶ所	実長	一里九町三六間
和田村（又、伊東と呼ぶ）			三、七九二里一六町一間
● 主要測線距離（『日本実測録』より引用）	計	梵天の数 七一九箇所	二三二里二七町五〇間三尺
● 伊能隊の測量旅行距離	沿海距離	(八九・四三七一八km)	
● 伊能忠敬の科学的業績（古今書院）より引用			

一四、八九四・〇七km（筆者換算一四、八九三・九五）

街道 三、〇四八里一〇町一九間

一一、九七一・五四km（筆者換算一一、九七一・四四）

島嶼・湖沼の周廻 一、七四六里一町一四間

六、八五八・二九km（筆者換算六、八五八・二四）

計 八、五八七里一町三四間

三三、七二三・九〇km（筆者換算三三、七二三・六三）

※ 注釈（保柳睦美記）

北海道は、伊能忠敬が測量した距離だけとする。

一尺は、〇・三〇三〇三mとして換算する。

前記以外に社寺や止宿宅までの仕越分を加えると、さらに一〇%内外は、大きくなるだろう。

● 主測線距離（「測量日記」より引用）

八、六一六里一〇町三・五間

三三、八三八・七一km（筆者換算三三、八三八・四五）

測量全距離（再測距離も含む）「測量日記」より引用

九、八七六里一六町五五・五間

三八、七八七・八四km（筆者換算三八、七八七・五五）

※ 注釈（保柳睦美記）

江戸府内測量での距離は不明である。

「日本実測録」に記されている「主測線距離」よりも長くなっているのは、「測量日記」では、仕越分を加えてあるので当然である。

他日修正の機会があるとすれば、そのときの合計距離は、さらに長くなる見込みである。なお、距離は細かく計算してあるが、む

しろ概数的のみでもらいたい。

保柳睦美氏は、「測量日記」を基にした測量距離の注釈で「江戸府内測量での距離は不明である」と記述しているが、筆者は、「忠敬先生日記五一」を解説し、第十次江戸府内一回目の測量距離を十九里三十二町五寸（七八・一〇九〇一km）と、算出した。

「伊能隊の測量旅行距離」では、「日本実測録」より集計した「主測線距離」は、八千五百八十七里一町三十四間、一尺は〇・三〇三〇三mとして換算し、三万三千七百二十三・九〇km（筆者換算三万三千七百二十三・六三km）と、記されている。

また、「測量日記」により集計した「主測線距離」は、八千六百十六里十町三間半、三万三千八百三十八・七一km（筆者換算三万三千八百五十六・四〇km）、

「測量全距離（再測距離も含む）」は、九千八百七十六里十六町五十五間半、三万八千七百八十七・八四km（筆者換算三万八千七百八十七・五五km）と、記述されている。
したがつて測量距離は、「測量日記」により集計した「測量全距離」を使用することにした。しかし、このなかには前述したように江戸府内の測量距離が含まれていないので、筆者が算出した一回目の測量距離十九里三十二町五寸を加えて、九千八百九十六里十二町五十五間三尺五寸（三万八千八百六十五・九五km・筆者換算三万八千八百六十五・六六km）を用いることにした。

全国測量で、梵天を立てた箇所を求めるには、
(測量日記の測量全距離+江戸府内測量距離) ÷ (熱海村より下田町迄の距離・梵天を立てた箇所) で求められる。

(三八・七八七・五五km十七八・一一km) ÷ (八九・四三七km ÷ 七) 八間五寸、黒崎より二里という。上石坂立場、銀杏屋定市中食。

一九箇所)

II三八・八六五・六六km ÷ ○・一二四三九km

II三一二、四五〇(箇所) 約三一万箇所。

これにより全国で梵天を立てた箇所は、約三一万箇所と推察できる。

・黒崎駅より山家宿

次に「筑前国黒崎駅より山家宿までの長崎街道で梵天を立てた箇所は、「伊能大図の下絵図」から四百八十九箇所、この区間の測量距離は、「測量日記」から十二里十九町二十六間五尺五寸(四九・二四八七km)であることがわかつた。

この測定値から、全国で梵天を立てた箇所は、

(三八・七八七・五五km十七八・一一km) ÷ (四九・二四八七km ÷ 四八九箇所)

II三八・八六五・六六km ÷ ○・一〇〇七一km

II三八五・九一七(箇所) 約三九万箇所

これにより全国で梵天を立てた箇所は、約三九万箇所と推察できる。

資料四 第八次九州二回目測量日記

佐久間達夫校訂

・自筑前国黒崎駅至山家宿

文化九年一月二十九日 曙天、小雨。朝六ツ後黒崎田町出立。手分、後手我等、門谷、尾形、保木、甚七、同所より初め、遠賀郡熊手村字京良下、人家三四軒、右引野村、左市瀬村。上上津役村、左少。引野村、下上津役村、上上津役村、三ヶ村入会。字上ノ原、小休。また左右上上津役村字町上津役村小休。小嶺村界まで測る。一里二十二町十

飯塚駅

一 梵天数

八七ヶ所

実長 二里 六町五四間

勝野村字鶴池

一 梵天数

一〇〇ヶ所

実長 二里二二町三四間五尺八寸

木屋瀬村

一 梵天数

四三ヶ所

実長 一里一九町三間

黒崎駅
一 梵天数 五五ヶ所 実長 一里二二町一八間五寸
小嶺村
一 梵天数 四三ヶ所 実長 一里一九町三間

資料五 長崎街道下絵図 伊能忠敬記念館所蔵
二月二日 木屋瀬宿出立 飯塚宿止宿
二月三日 飯塚宿出立 内野宿止宿
二月四日 内野宿出立 山家宿止宿

(以下、出立・逗留のみ記述)

木屋瀬宿代官小嶋源五右衛門病気を断り手代を出す。
十九町三間。上石坂より一里という。黒崎駅より三里という。それより赤間道の追分まで測る。四町三十九間三尺。先手合一里二十二町四十三間三尺。木屋瀬駅九ツ後に着。止宿本陣甚平、別宿長崎屋弥平治。
村字上石坂立場、中食藤太郎。石坂川土橋幅九間。字下石坂、馬場山村字茶屋原、楠橋村字真名子、鞍手郡木屋瀬駅止宿前まで測る。一里

先手坂部、永井、今泉、箱田、佐助、遠賀郡小嶺村より初め、香月

月

一 梵天数 四六ヶ所 実長 一里一〇町三六間

瀬戸村字瀬戸鼻（秋月街道追分）

一 梵天数 一一ヶ所 実長 八町五三間二寸

寿命村新茶屋

一 梵天数 五四ヶ所 実長 一里三〇町一四間

内野駅 冷水峠

一 梵天数 九三ヶ所 実長 一里七町四三間五尺

山家宿上西山茶屋ヶ原

計 梵天の数 四八九箇所

街道距離 一二里一九町二六間五尺五寸

(四九・二四八七四km)

・三宅島一周

島嶼の一島である「伊豆国三宅島」の一周期距離は、「測量日記」から

七里二八町六間四尺（三〇・五五七五km）、この区間で梵天を立てた箇所は、「伊能大図の下絵図」から三百五十九箇所である。

この測定値から、全国で梵天を立てた箇所は、

（三、八七八・五五km + 七八・一一km）÷（三〇・五五七五km ÷ 二五九箇所）

＝三八・八六五・六六km ÷ ○・一一七九八km

＝三二九・四二五（箇所） 約三三万箇所

これにより全国で梵天の立てた箇所は、約三三万箇所と推察できる。

・文化十二年五月十九日 四ツ時頃、伊豆七島の内三宅島伊ヶ谷村前

浜へ着岸。上陸同村に止宿。但し乗船は陸へ引上げ置。湊無し。当島迄下田湊より海路二十六里といい伝。止宿三宅島内伊ヶ谷村内前浜二

軒内村委会所、笛本新兵衛婦宅。当島地役人笛本新兵衛、同神主土生伊賀、其外村役人出る。

八月一二日 神津島へ渡海

伊谷村逗留

（以下、出立・逗留のみ記述）

五月二〇日 伊谷村出立

（八丈島へ渡海、六月二八日迄同島測量逗留）

六月二九日 伊谷村出立

（漂流相模國三崎湊に着岸）

七月一日 八丈島出帆、三宅島着岸

七月一二月 伊谷村より御藏島へ渡海 御藏島止宿

（御藏島測量 逗留）

七月二二日 御藏島より三宅島へ渡海 伊谷村止宿

伊谷村出立 神着村止宿

七月二三日 神着村出立 坪田村止宿

七月二十四日 坪田村逗留

七月二十五日 坪田村出立 阿古村止宿

七月二六日 阿古村逗留

七月二七日 阿古村出立 伊谷村止宿

七月二八日 伊谷村逗留

（神津島渡海のため、八月一二日迄逗留）

資料六 第九次伊豆七島・富士山麓付近測量日記

佐久間達夫校訂

・三宅島一周

八月一二日

資料七

三宅島の下絵図

伊能忠敬記念館所蔵

黒崎駅より山家宿

距離 一二里一九町二六間五尺五寸 (四九・二四八七四km)

梵天を立てた数 四八九箇所

梵天間の距離 一〇一m

全国で梵天を立てた数の推測値 約三九万箇所

梵天数 三〇ヶ所

梵天数 四六ヶ所

梵天数 六六ヶ所

梵天数 四九ヶ所

梵天数 二六ヶ所

梵天数 二六ヶ所

梵天数 四二ヶ所

梵天数 二五九ヶ所

梵天数 七里二八町六間四尺 (三〇・五五七五五km)

梵天数 七里二八町六間四尺

梵天数 (三〇・五五七五五km)

計

梵天の数 二五九ヶ所

島一周の距離 七里二八町六間四尺

このほか参考迄に、次の二箇所について記す。
・東海道四日市宿より坂下宿（距離は、日本実測録。梵天を立てた数
は、伊能大図の下絵図を使用）

距離 九里一二町二〇間半
梵天を立てた数 二九九箇所

全国で梵天を立てた数の推測値 約三三万箇所

標本調査の結果、全国測量で、梵天を立てた箇所の推測値は、次の通りである。

- ・熱海村より下田町
- 距離 一二里二七町五〇間三尺 (八九・四三七一km)
- 梵天を立てた数 七一九箇所

梵天を立てた数は、伊能大図の下絵図を使用

距離 一二里三三二町二一間半
梵天を立てた数 四一〇箇所

全国で梵天を立てた数の推測値 約三三万箇所

これらの数値から、伊能測量隊の梵天間の平均距離は、百メートル

伊能忠敬研究 第58号 2009年

- 梵天間の距離 一二四m
- 梵天を立てた数 約三三万箇所

から百三十メートル、全国で梵天を立てた数の推測値は、三十万箇所から四十万箇所といいうる。

伊能忠敬が、測量関係の沢山の記録を残してくれた未知のものを知ることの喜びと夢を与えてくれる。梵天を立てた箇所もそのひとつである。

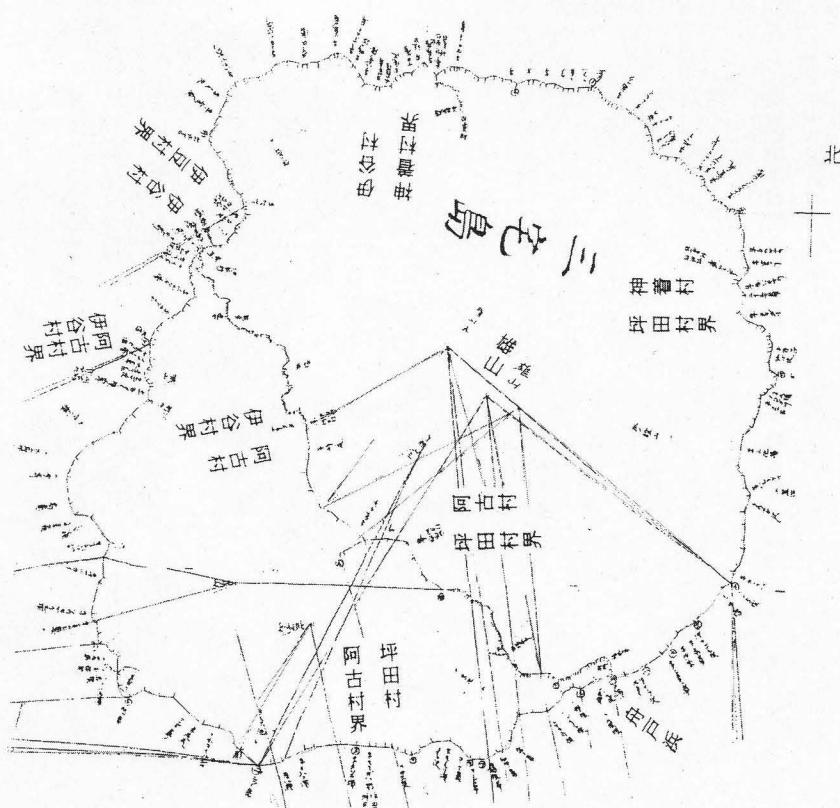
(さくま たつお・伊能忠敬研究家)

○三宅島神着村付近の下絵図



○伊能大図の下絵図・三宅島（原図縮小）

伊能忠敬記念館蔵



名著『伊能忠敬』—その時代と人脈（二）

前田幸子

渡辺洪基—地学協会の創設者・国家学の伝道師

伊能忠敬の記念碑建設にあたって東京地学協会の幹事として事業を推進したのが渡辺洪基である。

渡辺洪基（一八四八—一九〇二）は越前武生の医者の子として生まれ、箕作麟祥に英語を、福沢諭吉の慶應義塾で洋学を学び、一八七一（明治四）年外務省二等書記官として岩倉使節団に随行。帰国後の一八八五年、三七歳で東京府知事、一八八六年、三八歳で帝国大学の初代総長、その後、オーストリア公使、貴族院議員などを歴任した。

渡辺はオーストリアの駐在書記官をしていた時にウィーン地理学協会会員となり、國の發展における地学の重要性を知つて日本にも地学を専門とする機関が必要であると痛感、帰国後の一八七九年に榎本武揚や元英國王立地理學協会会員である鍋島直大らとはかつて協会を設立した。渡辺は地学協会のみならず、「府下ノ學術協会一時殆ンド君ノ管理ニ属セザルモノナク、三十六會長ノ称アルニ至ル」と伝えられるほど多くの団体に関わり、學術行政に辣腕を振るつたといわれる。



東京地学協会—遺功表建設に四、三九二円集めた貴顕の団体

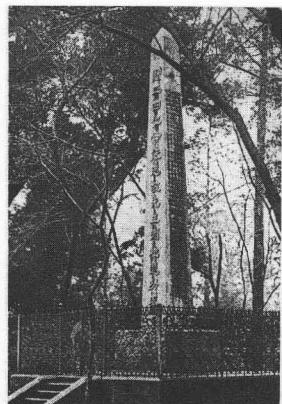
伊能忠敬の記念碑の建立にあたって佐野常民が演説を行い、また建碑の費用を集めた東京地学協会とはどのようなものであつたか。『東京

八八七）六月三〇日付で出願、八月十七日付で許可された。許可後、二年の期間をかけて工事が完成、明治二十二年十一月の徐幕式に至る。遺功表建設には苦労があつたようで、四月十三日の忠敬の命日に除幕式を挙行すべきところ、半年以上も遅れた。建設の経緯と会計の収支について、同年十二月十四日付で渡辺が幹事として報告している。

渡辺は伊藤博文の立憲政友会の創立にも参加するとともに、伊藤の主張する国家学会の創設に関わった。国家学会は「國政知」の形成すなわち學問による國政の基礎づけという理念に基づいた研究団体であり遺功表の出願と同年の一八八七年、渡辺が学長を務める帝國大學内に創設された。渡辺は明治という新しい國家体制にふさわしい「治國平天下ノ學」としてヨーロッパ流の政治経済学を志向、政治エリートの養成に「本邦ノ歴史地学及統計ヲ」利用しようとしていた。すなわち西欧諸国と伍していく強力な國家の形成、そのための人材の育成を切望していたのであり、伊藤とは理念を共有していたのであつた。国家学会のオーガナイザー、イデオロギーとしての渡辺の働きは目覚ましいもので、「國家学の伝道師」と形容すべきものだつたといわれる。渡辺の死に際して地学協会は「氏ハ実ニ学者、実業家、政治家ノ間ニ介在シ、相互ノ意志ヲ疎通シ、統一シ、以テ地学研究ヲ一定ノ方向ニ進捗セシムルニ於テ、最モ適當ノ人タリシナリ」と、その功績を讃えている。

地学協会報告』所収の「東京地學協會規則」前文に述べられた設立の趣旨を引用する。

「現今地學ノ用日月多キヲ 加ユルノ形勢ニ當リテ同心協力以テ此學ノ進歩ヲ謀ルノ道ナキヲ憂ヒ明治十二年二月廿二日鍋島直大岡護美榎本武揚



赤松則良花房義質、渡辺洪基、北沢正誠桂太郎、堀江芳介柳猶悦梶山鼎介伴鐵太郎黒岡帶刀曾根俊虎等上野公園内精養軒ニ集會シ本會設立ノ主旨ヲ議シ鍋島直大岡護美渡辺洪基桂太郎北沢正誠ヲ撰ンテ規則立案ノ委員トシ北白川宮三品能久親王殿下ヲ推シテ社長トシ……左ノ規則ヲ設ケ東京地學協會ヲ設立スルヲ議決ス。」と書いてあるが、大変読みにくい。この協会は社団法人として現在も続いている同協会のホームページに「東京地學協會の沿革」という文章がある。設立当初の原文とは異なるが、分かりやすいのでここに引用してみる。

「東京地學協會は、地學の総合的な發展ならびに普及を主な目的としております。明治の初期、外交官としてヨーロッパに駐在していた渡辺洪基、鍋島直大、長岡護美、榎本武揚の四氏が、ウイーン、ondon、サンクトペテルブルクの各王立地理學協會の會員となり、地學が國の發展に大いに貢獻していることを見て、文明開化を急ぐわが國にもこのような協会が必要である、と痛感しました。帰國後、諸氏は桂太郎、花房義質と共に創立委員となり、また赤松則良、北沢正誠、佐野常民、塚本明毅、福澤諭吉、福地源一郎、山田顯義を幹事、北白川能久親王を社長に、一八七九（明治十二）年四月十八日に東京地學

協会を創立しました。このように、初期の下院は政治家、外交官、軍人、貴族で構成されておりましたが、わが國に地學の専門家が育つにつれて、地学者が運営にあたるようになりました。したがつて初期には能久親王、載仁親王、榎本武揚、徳川頼倫、細川護立氏などが会長を務められ、研究者が会長に就任したのは一九七〇年以降です。（略）

「東京地學協會規則」前文に続き、「本會設立ノ目的」として次の五項目を掲げる。（カタカナをひらがなに直した）

第一 地學に於いて経済軍務其の他関する有益なる事件の發明本會の見聞に触れる者は時々簡便の方法を以て之を編纂出版して社員の講究に供し及び公衆に報知する事

第二 内外古今地學ニ関する書籍航海日記紀行の諸書類器械地図海図地誌其他探訪録本社に寄付せる者並に各人所有の有益なる者を集め一文庫を設け之に備へ置く事

第三 探訪旅行に從事し又は其地の旅行人にして地學上の探訪を為さんと欲する者に本會に於いて経歴ことを要する地方其地方に赴くに最便利なる方法深く探偵せんことを欲する事物特に採蒐せんことを欲する博物学の事物及び地學の進歩に益ある報告等本會の希望する条件を簡略に筆記し心得書を作り之に付托する事

第四 各国に在る地學協會及び地學を研窮する外国人及び内外に散居せる我學士等と地學の事に就き文書往復する事

第五 地學の進歩發明等に効績ありし人に賞牌其の他相当の褒賞を与へ之を勧奨する事

この五つの目的に照らしてみると、伊能忠敬の顕彰事業は地學協会の事業として大変ふさわしいものであったということができよう。

この協会が、実はたんなる学術団体ではなかつたことは渡辺洪基の項でも述べたが、最も特徴的のはその豪華な顔ぶれである。創立日すなわち明治十二年四月十八日入社の著名なメンバーを次に掲げる。

北白川能久親王 鍋島直大 榎本武揚 渡辺洪基 長岡護美 花房義質 桂太郎 松平慶永（春嶽）福沢諭吉 福地源一郎 谷干城 大山巖 佐野常民 副島種臣 大隈重信 井上馨 山縣有朋 大木喬任等々。幕末・明治の貴顕の名前がずらりと並んでいる。その年のうちに伊藤博文やアーネスト・サトウら幾人かの外国人の名前も加わった。当時においてきわめて地位高く富裕な人々の団体であり募金も容易であつたといえよう。佐野常民は演説の場所としてこの会を選び、その結果、宮内省から百円の下賜を受けたほか、四、三九二円という多額の寄付を集めて所期の目的を達することができたのである。

北白川宮能久親王—東京地学協会初代社長になつた異色の宮様

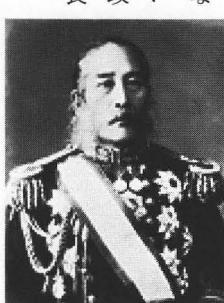
佐野常民による伊能忠敬への贈位ならびに記念碑建立運動の中心となつた東京地学協会の当時の社長は北白川宮能久親王であった。

北白川宮能久親王（一八四七—一八九五）は伏見宮家の出、明治天皇の叔父にあたる。寛永寺貫主・日光輪王寺門跡を継承し「輪王寺宮」と称されていたが、徳川慶喜の依頼によりその助命を陳情。また寛永寺に立て籠もつた彰義隊に担がれ、のちには奥羽越列藩同盟の盟主に擁立されて榎本武揚率いる艦隊で仙台へ北上、新政府に対抗したという異色の経歴をもつ。戊辰戦争後、許されてプロイセンへ留学するが当地でドイツ貴族の末亡人との婚約を発表して問題となり帰



榎本武揚—箱田良助の二男にして東京地学協会副社長・大臣

同じく東京地学協会の当時の副社長は榎本武揚（一八三六—一九〇六）、すなわち伊能忠敬の内弟子・箱田良助（通称・佐太夫）の二男であつた。佐野常民も東京地学会における演説のなかでその点に言及し、「榎本武揚氏の如きは、先考（＝亡父）佐太夫君その門下の逸材なるをもつて、今日これを説く人に適すといえども、余はその主唱者たるをもつて、氏等の勧むるところとなり、敢えて諸君に演述せん。」と、本来は榎本がこの演説をするに相応しい人物であると述べている。榎本がこの贈位・碑設立にどのように関与したのかは詳らかではないが、あまり積極的に動いた形跡は見当たらない。父親の顕彰ともとられかねない行動はあえて慎んだのであろうか。いずれ、能久親王と榎本武揚という明治政府に対して微妙な立場にある人物が社長と副社長に就任しているのは興味深い。



菊池大麓——教科書の国定化を断行した伝説の大秀才

遺功表の設立は伊能忠敬の名を明治の世に広めることとなつた。しかし、忠敬の名が全国的に知れ渡るようになつたのは教科書に載るようになつてからである。

伊能忠敬の国定教科書「修身」へ登載は明治三七年（一九〇四）に始まり、昭和二〇年（一九四五）まで続いたが、教科書の国定化を断行したのは当時の文部大臣・菊池大麓であった。



菊池大麓（一八五五—一九一七）は洋学者・箕作秋坪の次男として江戸に生まれ、父の実家菊池家の養子となる。数学者、東京帝国大学総長、文部大臣、枢密院顧問官、貴族院議員。男爵。墓所は谷中靈園。菊池大麓は明治期の教育行政の分野で大きな影響力を發揮し、その結果伊能忠敬の顕彰にも大いに寄与することとなつたが、この人物及び教科書について述べると長くなるので、稿を改めることとした。

三井八郎右衛門高棟——帝国学士院に二千円寄付した三井財閥の総領

修身教科書で伊能忠敬の名の知名度は上がつたが、科学者としての忠敬の実像は知られていないかった。長岡半太郎は忠敬の業績自体を顕彰すべく帝国学士院（菊池大麓院長）から『伊能忠敬』を刊行することを企図した。これに対して金二千円を寄付したのが三井高棟である。

三井高棟（一八五七—一九四八）は三井家一〇代目の当主。三井家の当主は代々八郎右衛門を名乗つた。

三井家は、伊勢・松阪の商人三井高利が江戸に創業した越後屋三井呉服店（三越）で「現銀掛なし」と当時としては画期的商法でまた

たく間に成功し、両替商を兼業、幕府御用商人となる。維新後も新政府の政商として事業を拡大、日本最大の財閥となつた。高棟は團琢磨とともに三井財閥を統括するかたわら、三井家の迎賓館として三井綱町俱楽部を建設、幼児教育のため「若葉会幼稚園」を設立、また国宝の茶室「如庵」を取得するなど文化・芸術の分野に関心を示した。自身も大磯の邸宅内に城山窯を築いて作陶に励み、芸術的才能を發揮した。高棟の伊能忠敬への関心がどのようなものであつたかは不明だが、

『伊能忠敬』刊行のために寄付した二千円は現在の数億円にあたる。

團琢磨——長岡半太郎の師・長男に「伊能」と名付けた三井の大番頭

『伊能忠敬』出版に关心を寄せたのは、三井財閥の総領の高棟よりもむしろ大番頭・團琢磨のほうだったと思われる。

團琢磨（一八五八—一九三二）は福岡藩士・神屋宅之丞の四男に生まれ、十二歳で團尚静の養子となる。藩校修猷館に学び、明治四年、十四歳の時、海外留学生として岩倉使節団や津田梅子ら留学生らと渡米。そのまま七年間留学。マサチューセッツ工科大学で鉱山学を学び、卒業とともに帰国した。帰国後、東京大学の星学（天文学）助教授となるが、専門の鉱山学の知識を生かすべく工部省に移り、三池鉱山局技師となる。その後、鉱山が政府から売却されたのとともに三井に移り、一九二八年三井合名会社理事長として三井財閥の総帥となる。以後、名実ともに日本経済界の総領となるが、一九三二年右翼団体血盟団により暗殺された。墓所は護国寺。

さて、その伝記『男爵團琢磨伝』によると、鉱山学を学んだ團が星学（天文学）助教授となつたのは、就職難の中での行きがかり上のことで、専門外である團の就任を理学部長・菊池大麓が承認して実現した。

注目すべきはこのときの教え子に長岡半太郎がいたことである。後年まで交渉があつたという長岡らの追憶によると、若き團助教授は学生と「友達半分に打ち解けて親しく天体観測の製図などした」ということである。團は四年間の在職中天体観測を行い、のち工部省に転じた。

もうひとつ注目すべきは、團が自分の長男に「伊能」と名付けていることである。前掲書によれば、「長男伊能は三人目に始めて得た男の子なれば日々自ら抱きかゝへてお守りをするを樂みとした。」とある。待望の男子、その大切な長男に團琢磨は「伊能」と名付けたのである。

團伊能は明治二五年（一八九二）大牟田生まれ。東京帝国大学文科大学哲学科美術科卒。東京帝国大学文学部助教授（西洋美術史）。のち参議院議員、プリンス自動車社長、九州朝日放送会長。男爵。著書に『概觀歐洲美術史』『伊太利美術紀行』『バルナスの巡礼』等がある。

團伊能の長男が作曲家・随筆家として著名な團伊玖磨（いくま）（一九一四—二〇〇一）である。伊玖磨の「伊」の字は父・伊能の一字を受けたものであろう。團琢磨が長男に「伊能」と名付けた理由は不明である。

次男の勝磨（一九〇四—一九九六）については「次男勝磨は明治三十七年十月十六日に生れた、恰も其時沙河戦争の勝報を得たので勝磨と命名した。」と明確な記述があるだけに残念である。團勝磨は「ウニの發生」で著名な生物学者で東京都立大学総長を務めた。『伊能忠敬の科学的業績』の著者・保柳睦美とは同じ理学部所属であり教授会等で度々同席したはずである。両者は伊能忠敬について語り合つたことがあつただろうか。

つづく



（まえだ こうこ・地方公務員）

【参考資料】

『ドイツ国家学と明治国制』

瀧井一博著 ミネルヴァ書房

『彰義隊戦史』

山崎有信著 隆文館

『男爵團琢磨伝』

故団男爵伝記編纂委員会編・刊

※画像資料

渡辺洪基 北白川宮能久親王 榎本武揚 菊池大麓 團琢磨

『幕末・明治・大正・回顧八十年史』所収

伊能忠敬旧遺功表

『伊能忠敬』、岩波書店 所収

*

*

*

*

落花生ボツチ

江口俊子

晩秋、千葉県山武市、富里市、八街市のいたるところでボツチの風景が見られる。雨よけを昔ながらの菰で作ったボツチは風情があるが、この畑にはおばあちゃんが作つた緩くてすんぐりとしたボツチたちが青いビニールを被せられて並んでいる。

新年には落花生の新豆が出回る。





伊能塾

第四回例会（十月十八日実施）再録

○講演二「大野弥三郎の墓を訪ねて」 講師・鈴木純子さん

一、荻原哲夫さん作成のCD「あつ！と驚く弥三郎」

今回は昨年の九月に急逝された荻原哲夫さんの「あつ！と驚く弥三郎」という標題のCDをご紹介いたします。これは荻原さんが第一回目の伊能塾のときにお持ちになつたデータをCDに入れたもので、内容は伊能忠敬が使用した観測機器を作成することで知られる大野弥五郎の、その孫にあたる弥三郎規周のお墓を訪ねた際の記録です。

ご存じのように大野家は三代続いた精密器械師の家柄で、初代の大野五郎は息子の弥三郎規行とともに伊能隊出立の見送りに来ていたことが『測量日記』に見え、また規行も『忠誨日記』に頻繁に登場します。

三、弥三郎規周の大きな墓

三郎規周の墓は大阪市の北靈園にあります。息子の大野規好が建立したものでオベリスク型の、管理事務所前からすぐわかつたという高い墓碑です。あまりに大きいので、荻原さんは「あつ！と」驚かれたようです。日影の長さ四・八mと四・九m、すなわち一丈六尺でいわゆる「丈六」の高さと推定されます。グーグルアースで調べた画像が入っていますが、墓地の中に規周の墓の日影が長く延びています。この墓碑と旧伊能忠敬測地遺功表とは形が似ており、明治二〇年代頃の流行だったのかかもしれないという感想を書かれています。

以上、荻原さんが作成されたCDの内容をご紹介いたしました。

なお、このCDの内容はインターネットの同名のブログとしてアップされており、そちらでも見ることができます。（了）

大野規周の死亡記事（時事新報）

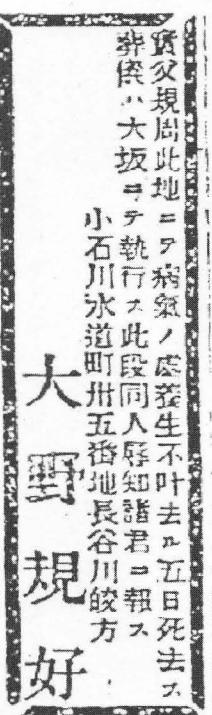
○叙任

○十月六日

非職元大藏三等技師從六位勳六等 大野 規周
特旨ヲ以テ位階被進敍正六位

大野の孫・弥三郎規周（一八一〇—一八八六）は榎本武揚らとともに幕府派遣留学生としてオランダに留学、帰国して福井藩や幕府海軍で器械技術の指導にあたり、のちに大阪造幣局技師となりました。

息子の大野規好の名で時事新報に出された規周の死亡記事が残っていますが、「葬儀ハ大坂ニテ執行ス」と記してあり、規好の住所が小石川の長谷川皎方となっています。この住所が規周が仕えた福井藩主・松平春嶽の屋敷の中であり、長谷川皎という人が元福井藩士であることから、福井藩時代の同僚かと思われます。また、松平春嶽は懷中時計の愛用者で、上京に際し「十二時十三分發。」等と、時刻入りの日記を書いていましたが、これも大野規周との関係が伺われる話です。



大野規好



あつと驚く弥三郎！大野規周の墓
オバリスト型で大野規好が建立(大阪市北靈園)

明治20年代頃の流行?
(旧伊能忠敬測地遺功表
1889明治22年頃)



宮永孝著「幕府オランダ留学生一職方・大野弥三郎」による

8. 大野弥三郎の肖像と署名(三崎ユキ氏提供、宮永孝所蔵)

福井藩の松平春岳は懐中時計の愛用者

大野弥三郎規周は松平春嶽/慶永に仕えてから訪欧した。

大野弥三郎規周の肖像と署名 (三崎ユキ氏提供、宮永孝所蔵)

九州支部だより——伊能忠敬小倉顕彰会——

第七回「伊能忠敬献花の集い」開かれる

石川清一

一、献花の集い・式典

去る十月二十九日、例年九月に行われていて「献花の集い」が、今年は「地図展 in 北九州」（伊能忠敬九州測量開始二〇〇年記念）が開催の下、中央から地図展開会式においての国土地理院・小牧和雄院長、地図展推進協議会・野々村邦夫会長、当伊能忠敬研究会・星埜代表理事、地元北九州市長他各来賓、市・商店街関係者、顕彰会関係者等多くの出席者により盛大に挙行されました。式典は、旅装束を着た地元街づくり団体の四人が扮した伊能忠敬御一行が太鼓に合わせ木(造)の橋、常盤橋を渡つて来るパフォーマンスで開幕。穂吉正明顕彰会々長の挨拶、来賓の祝辞に続き、伊能洋・陽子様ご夫妻からの心のこもった祝電が披露された後、出席者全員が一人ずつ菊の花を記念碑前に献花しました。

二、星埜代表理事と九州支部との懇談会

「献花の集い」終了後の夕刻、代表理事ご来港の機に役員と懇談の時間を持ちました。星埜代表からの目下の活動等を伺い、私から九州文部の現況報告、本部総会への希望等や若干の意見交換を行いました。折から急浮上している「佐賀と伊能忠敬との関係」に話題が及び、一つは佐賀の偉人で日本赤十字社の創設者で、明治期に伊能忠敬の贈位運動を推進した（この事は佐賀では知られていない）佐野常民と伊能

家。もう一つは伊能測量隊の佐賀入りを出迎えた佐賀藩士山領主馬と星埜（代表理事）家。それぞれ関係があるらしい事を聞き、思わぬ繋がりにびっくりしたところです。発端は、会報『伊能忠敬研究二〇〇九年第五七号』（六六頁以下）の前田幸子編集長の記事に佐賀の会員・馬場良平氏が注目し、前田さんと東京の先生方の協力を得てわかつたようです。更に、調査している段階で今後の進展が待たれます。

（いしかわ せいいち・九州支部長）

左・挨拶する穂吉正明・伊能

忠敬小倉顕彰会々長

下・「献花の集い」を報じた西

日本新聞（十月三十日）

44.10.30 10:30 AM
超短波
江戸時代、日を手向け、地元街づくり
功績をたたえる「献花の
集い」が29日、九州測量
の出発地とされる北九州
市小倉北区京町の常盤橋
のたもとで開かれた。市
民ら約70人が記念碑に菊
本店に会わせて催した。

今年は伊能が九州
の測量を開始してか
らちょうど200年



見習え」の声も。
(北九州)

伊能忠敬九州測量開始200年記念

「地図展2009 in 北九州」開催される

石川清一



「地図展 2009 in 北九州」

主催：地図展推進協議会
後援：国土交通省国土地理院
特別協力：伊能忠敬研究会九州
支部
伊能忠敬小倉顕彰会
小倉井筒屋
(株)ゼンリン

毎年、国土地理院（今年から地図展推進協議会）他主催の「地図展」が、今年は伊能忠敬九州測量二〇〇年記念に合わせ北九州市「小倉井筒屋」百貨店を会場に十月二九日～十一月一日迄開催された。特別協力として当九州支部も伊能図コーナーの説明要員として期間中連日二～三名が協力、活躍した。会場には伊能大図の九州部分や、北九州市の変遷を示す昔と今の地図、月の地形図等が展示され、又、近くのゼンリン地図の資料館で「地図教室」が開催されるなど、子供も大人も楽しめる企画で連日盛況でした。尚、地図展初日には、会場に近い小倉常盤橋・伊能忠敬記念碑前で恒例の「献花の集い」式典も行われた。

※ 地図展説明員で協力頂いた方—野田、河島、井上、熊谷、中富、国重一の諸兄に御礼申し上げます。

（いしかわ せいいち・九州支部長）

【七〇頁に関連記事】



今回展示された国土地理院所蔵「伊能大図（米国）彩色図」の一部・有明海沿岸

（ばば りょうへい 塚崎・唐津往還を歩く会事務局長）

200年前の佐賀を歩こう！ 16畳大の伊能図初公開

佐賀県立図書館蔵『伊能大図』を一般公開

馬場良平

本をテーマにしたまちづくりイベント『BOOKマルシェ佐賀2009』の一環として、佐賀県立図書館が所蔵している「伊能大図」の一般公開が十一月十五日、佐賀市にあるエスプラッツ二階展示スペースで行われた。今回が県内初公開となる同図書館蔵『伊能大図』の十六畳大の地図の上を歩いて見学できる催しで、これまで展示が困難だった地図を公開する「ちょうど良い機会」として「BOOKマルシェ」への協力展示が決まったもの。フロア展示のほか『測量日記』全七巻の展示、佐賀県域での伊能測量についてのパネル展示なども行われ、佐賀県や佐賀県立図書館のホームページ、朝日新聞の北九州版等でも報道された。伊能忠敬が佐賀でもっと知られる契機となることを期待している。

大滝教頭先生『わが故郷の忠敬測量物語』

垣見壯一

「越後平野も霜枯れ県境の山々は白銀に輝いています。伊能測量隊が第四次測量で群馬県境三国峠を越えたのが旧九月二十九日、新一一月一二日。天候には恵まれた様ですが、例年冠雪一〇月の越後山脈での測量作業の苦労が忍ばれます。

会報第五一号に記載の新潟県村上市の大滝先生から、冊子『わが故郷の忠敬測量物語』をいただきましたので同封します。山形県境に位置する北国の海辺の町で教材を作成し、生徒に測量を実施した努力と情熱に、小生も敬意をもつて大切に交際しています。」(略)新潟支部から編集部にお便りと冊子が届きました。ご存じ「歩測教頭先生」とこと村上市立上海府小学校の大滝友和先生がこれまでの研究成果をまとめ、『忠敬測量物語』と題して刊行されました。

我が故郷の忠敬測量物語



平成21年12月20日

村上市山陽町 大滝 友和

目次からその内容を紹介すると、第一章測量体験学習、第二章忠敬測量の足跡、第三章伊能忠敬の生涯、第四章資料となっていました。なかでも第一章の児童たちによる伊能測量法と地図作りの実地体験の記録は、他に例をみない貴重なものです。編笠姿の教頭先生と伊能隊の測量体験を、子供たちは一生忘ることはないでしょう。また第二章は享和二年(一八〇二)第三次測量時の伊能測量隊の地元での足跡を追跡した価値ある地域資料となっています。(編集部)

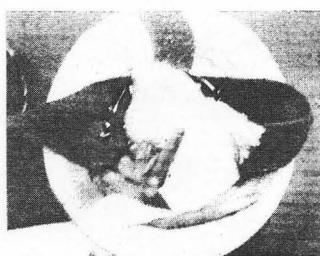
(かきみ そういうち)

発刊のことば

謹啓(略)およそ一〇年間、伊能忠敬の一生や全国測量のことと調べたり、聞き取り調査をしてきました。冊子にまとめようと考えたのは、上海府小学校に異動した年に、六年生と測量体験学習を行ったころです。その後、五年かけて少しづつ原稿を作つて出来上がりました。(略)

この冊子は決して私一人の力ではありません。測量体験学習でお世話になつた佐藤巧さん、伊能図などでご助言いただいた垣見壯一さんなど、たくさんの方の御支援とご協力があつてこそ完成したものですが、平成二年三月をもつて定年退職いたします。(略)私の目的

は小学校の歴史授業に、郷土の歴史を生かすことでした。冊子作りはその副産物にすぎません。(略)さて、去る一〇月五日、父・博が八二歳の命を閉じました。人に對する謙虚さと芯に秘めた強さを教えてくれた父でした。私の冊子作りには最大の理解者だったのです。謹んで、本冊子を亡き父に捧げます。敬白



測量隊の朝食を再現：岩船特産「やわらか麩」の料理



【府屋・又左衛門家】
又左衛門家は府屋の信号の角に立つ大きな造作のよい建物である。先代当主は又春氏。先々代当主は富樫又太郎氏。

3 府屋・又左衛門家

又左衛門家は府屋の信号の角に立つ大きな造作のよい建物である。先代当主は又春氏。先々代当主は富樫又太郎氏。

又太郎氏は富樫産業という木材総合会社を興して財を成した。政治家を志して山北村議員となり、昭和30年代の新潟県議会議員を三期務めている。又太郎氏で筆者が最も興味をもったのは、鶴泊・芦谷間の道路工事である。又太郎氏は県北岩船郡の社会基盤を強化するため、県議会段階で努力と活躍をした。その情熱の一端を、『山北村公民館報・第5号』[昭和31年2月10日発行]にみることができる。

発掘した（左から）浅野、松宮、畠山さん



須賀川の伊能忠敬研究會員

湖面の高さ定める

明治政府「変動恐れる」記述も



須賀川市の元高校教諭で伊能忠敬研究会員の松宮輝明さん(夫)ら

上部だけが見える状態だった。振り起した結果、政府の農務省が明治二十七年十一月十日付で、水争いを防ぐ目的で湖面の高さを定めた規則が刻まれていた。「水星の変動を免れた」とも記している。標石 자체は十六橋が開かれた後になってしまった。

野勝宣さん（富城原町）
（仙台市）と共に今
初めて作業に当たつて
疏水土地改良事務所の
許可を得た。
「文化財としてし
かりと残すべき、貴
な資料だと思ふ」と
す。
水星星占の標石は
苗代町山廻地区にも
ある。

の高さを定めた数値基準
水量を変動させないよう
す明治政府の考えが刻まれ
ていることが分かりまし
て、松宮さんは伊能忠敬の
跡と関連して福島県内の
量地点も調べており、「立
財としてしつかり残すべ
貴重な資料だと思う」と話
ています。

野勝良さん（宮城県農業試験場）の標石研究家の
崎市（仙台市）と共に、
初めて作業に当たった疏水土地改良事務所で
許可を得た。
「文化財としてして
かりと残すべき、貴
な資料だと思ふ」と
す。

の高さを定めた数値基準
水量を変動させないよう
す明治政府の考えが刻ま
ていることが分かりまし
松宮さんは伊能忠敬の
跡と関連して福島県内の
量地点も調べており、「文
財としてしつかり残すべ
貴重な資料だと思う」と話
ています。

安積疏水の標石発掘



■ 安積疏水の標石発掘

須賀川市在住

松宮輝明さん

水量基点

安積疏水猪苗代湖水量標ハ是ヨリ百二十八度ニ当リ十開ノ湖中ニシテ本標頭ヨリ低キ「五尺一寸五分ヲ以テ六尺二寸」ノ定水トス此基点ハ農務省建設ノ水量標ノ変動スルヲ恐レ之ヲ建者也

明治廿七年十一月十日

さだ明治十三年以前の
考へが記されている。
それが追加して刻んだ
設置されたとみられ、
これが分かった。

標石を発掘し、新聞で報道されました。

野勝宣さん（宮城県大崎市）と
畠山未津留さん（仙台市）と
共に、會津若松市河東町八田

須賀川市在住の松宮輝明さんは以前から測量の標石や「几号」に関心をもち、これらを保護・保存する活動を続けてきましたが、今年八月初め、標石研究家の浅

(「福島民報」八月二三日)

水量を変動させないよう促す明治政府の考えが刻まれていることが分かりました。松宮さんは伊能忠敬の足跡と関連して福島県内の測量地点も調べており、「文化財としてしつかり残すべき、貴重な資料だと思う」と話しています。

■所沢市民大学「佐原町巡り」講師体験記 井上靖子さん 所沢在住
去る九月十五日、所沢市民大学十四期・十六期生その他の方々のバス二台を連ねての佐原バスツアーが催されました。その際講師として妹・伊能陽子が招かれて居たのでしたが、あいにく体調を崩し急遽八十七歳の私にお鉢がまわって来ました。目を白黒させましたが、ここは交替するべきと思うことに致しました。

妹は気の毒がつてあれこれと資料を用意してくれました。お陰でどれだけ助けられたか感謝して居ります。

用意してあつた妹の「御縁がありまして・」の原稿と忠敬の家訓（そのまま）に訳文をつけたものを全員にお渡しました。

「御縁がありまして・・・」には、母の遺句にはじまる初期の記念館落成の様子、佐原での祖母の説明（来観者への）日々、包み紙として無造作に扱つてあつた地図の下書きの話、下書きなど読み解く難しさの為、古文書の勉強をはじめた話など記した一文でした。更に一寸した話題に忠敬が養子に入った頃のこと、伊能七家のこと、次々と他界された四人の妻のこと、また伊能家の当主としての役目の中でも一つ天明の大飢饉の時の臨機応変の乗り切り方など、話題を更に追加してくれました。それに加えて、私が子供の頃、外地から夏休みに帰った折は、見学者が見えるとソレツと祖母の手伝いに駆け出し、拡げる地図を下で支えたり、芳名録に署名を頂くための墨磨りを神妙にしたり、見学者が帰られると量程車や羅針盤を床の間に戻したりした思い出もお話ししました。

また忠敬は娘に留守中のことも細々指示し、漬物の具合までどうか、など、測量の合間のそんな心遣いがあつた話なども交え、バス二台を乗り換え、同じ様なことを訥訥と冷汗をかき乍ら、何とか過ごさせて頂きました。

佐原に入つてからは街並案内人の吉田さんと新井さんがバトンタッチして下さりホッと致しました。館内は吉田さんがマイク片手に張り切つて説明されていました。皆さん満足された様でした。記念館では豊田館長はじめ青木氏、紺野氏とも親しくご挨拶をさせて頂き、ゆっくり寛がせて下さりホソといたしました。どんなに有難かつたか感謝して居ります。

ジャージャー橋では忠敬の歩測七十纏せんと同じ歩数で渡れるかと、皆さんはしやいで居られました。旧宅も各々ゆっくり廻られ、薪倉、炭小屋、味噌倉、つるべ戸のあつた話など折々ませて一緒に廻りました。

私にとりましては、お盆の真最中ここで長男の誕生（しかも終戦記念日に）を得たこともなつかしく、戦後地方に出た折、主人のみ東京へ戻れ家族は保留となつた為、親子三人祖母の世話になり、祖母が次男を背負い危なく小野川に落ちそうになつた事。長男が三輪車ごと柳の下の用水路の橋から落ちたことなど走馬灯の様に思い出されました。

その後小野川沿いの散策・買物をへてバスで観福寺へ。二班に別れ忠敬の墓参、観福寺の立派さにも各自感歎の声をあげて居られました。

皆さん満足して後、一路所沢へと戻りました。

とても陽子さんの替りはつとまりませんでしたが、鈴木理事は満足して下さった様で、いささかほつとした一日でありました。（了）

9月15日 日帰りバス旅行 佐原の町並みめぐり

【スケジュール&コース】

所沢駅出発（8：30） — JR東所沢駅経由関越道所沢I/C — 東京外環道 — 東関東自動車道 — ホテル日航成田（昼食） — 東関東自動車道佐原香取I/C — 佐原町並みめぐり（伊能忠敬旧宅見学・伊能忠敬記念館見学・小野川沿い散策） — 観福寺参拝（伊能忠敬の墓） — 帰路 — 所沢駅解散（18：00）

暑くも無く寒くも無く、絶好の散策日和に恵まれ、会員のご家族及び、市民大学の受講生の参加もあり、総勢78人が2台のバスに分乗して楽しい一日を過ごしました。

- バス中では所沢市在住で伊能家直系の井上靖子さんからの伊能忠敬に関する手作りの資料配布と貴重なお話を聞かせていただくことが出来ました。（紹介者の鈴木理事に感謝！）
- 昼食は成田空港近くのホテル日航成田での豪華バイキングで大いに飲食し、話も弾みました。出来たての料理を頂き、デザート（果物・ケーキなど）から各種飲み物もあり、シニア料金と言うこと也有って、充分に元が取れました！
- 佐原の町並みめぐり及び、伊能忠敬の墓がある観福寺参拝ではボランティアの町並み案内人の吉田会長と新井さんに懇切丁寧なガイドをしていただき、楽しさも倍増でした。
 - ・佐原の江戸時代の街並みは、柳並木の小野川沿いに大事に保存されておりました。
 - ・伊能忠敬記念館での「忠敬が50歳を過ぎてから天文・暦学の勉強を始め71歳まで全国を測量して歩いて我が国最初の日本地図を完成させた」バイタリティーには驚かされました。



お世話になった町並み案内人の
吉田会長と新井さん



井上靖子さんと紹介者の鈴木理事
“ありがとうございました”



小野川沿いの江戸時代の町並み
柳の並木も風情がありました



■間宮海峡発見二〇〇年祭の報告



林蔵太鼓も上演された

茨城県つくばみらい市は去る七月二六日市が生んだ江戸時代の探検家間宮林蔵の間宮海峡発見二〇〇年」を記念する二〇〇年祭を開いた。市立井田小学校体育館をメイン会場として市民による多くの出し物で賑わい、郷土の偉人を讃えた。茨城県ウオーキング協会はこの日古河市で役員会を開いたため、朝からの参加はできなかつた

川上 清さん水戸市在住

が、会議終了後雰囲気でも味わいたいと戸歩く会四名が林蔵記念館及び会を開くに止まつた。

2009年(平成21年)7月27日 月曜日

林蔵の功績たたえる

間宮林蔵海峡発見200年祭

つくばみらい

林蔵の功績たたえる

児童ら研究発表や劇

間宮林蔵の功績たたえる

常陽新聞 2009.7.27

2009年(平成21年)7月27日 月曜日

なお、菩提寺の専称寺では追善法要が行われた由である。茨城県内紙の茨城新聞及び常陽新聞記事コピーを付して報告します。



つくばみらい 海峡発見200年祭

常陽新聞 2009.8.2



■先祖の故郷・佐原を訪ねる 福岡県田川郡在住 奥永 祐

九月のシルバーウィークを使って、ずっと行きたいと思っていた佐原を訪ねました。

伊能忠敬と先祖・琴の生母・妙諦のお墓参りをしました。

佐原の街並みは、江戸時代から時間が止まっているんじやないか、と思わせるような、そんな素敵なところでした。姉も叔父もいとこも一緒に行きました。皆、琴の嫁ぎ先の松田家の子孫です。

お墓参りは、市川市在住で妙諦の子孫である柏木隆雄氏に案内していただきました。伊能忠敬や妙諦のお墓を前にすると、なんとも言えない、とても不思議な気持ちになりました。

街中の伊能忠敬記念館にも寄りました。

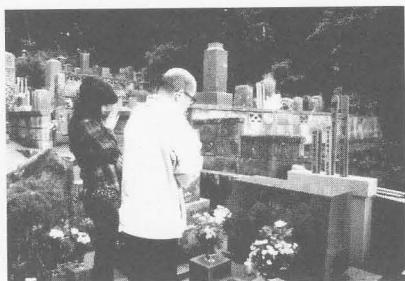
展示物を拝観して、改めて忠敬のすごさを知りました。

今回、九州の福岡から千葉県の佐原まで遠い旅でしたが、とても思い出深いものとなりました。

◇柏木隆雄さん談「娘が一人増えた

ような、不思議な喜びです。」

【編集部注・奥永渚さんは伊能忠敬の三女・琴女のご子孫。琴女の母・妙諦は柏木隆雄さんのご先祖である柏木乙右衛門幸七の女。】



柏木家の墓前で 奥永・松田さん



忠敬旧宅前にて 松田・柏木・奥永（右から二人目）さん

■私の主張「伊能大図歩いてみよう」
佐賀市で開催される地図展で「伊能大図」の上を歩き、伊能忠敬の偉業を体感してみようという馬場さんの主張が新聞に掲載されました。併せて佐賀市にある「微古館」での「御城下絵図を歩こう」展も紹介しまた伊能忠敬の贈位運動を推進し、実現させた佐賀出身の元勲・佐野常民との関わりも紹介しています。

私の主張

馬場 良平(59) 武雄市

「これまで」こうした絵図を見た機会が少なかつた人々がこれらを見ること、また、絵図を元に佐賀の町を歩くことによって、佐賀は城下町であったこと、佐賀には歴史と文化があるということなどを認識されるきっかけになり、この機運が佐嘉城築城400年記念事業につながればよいと思います。

有田町歴史民俗資料館では、安政6年（1859）松浦郡有田郷の

伊能大団歩いてみよう

賀県周辺部の伊能大図(複製地図)が公開されることです。二ノールで覆つた約16頁分の小さな地図を床に広げて、その上を歩いて見学できるという企画です。

伊能忠敬の測量隊は、文化9年(1812)から文化10年(1813)にかけて、津津瀬領や佐嘉藩領を測量踏査しています。ほとんどの測量は、伊能忠敬の偉業とその測量の中、伊能忠敬の偉業とその測量

佐野常民が伊能忠敬の事績を書き、
嶋海軍伝習所での伊能圖との出会い
で恩恵を受けただけであるう
か。文化9年（1812）9月19日
日 佐嘉城下に入った伊能測量隊
を迎えた山領主馬と佐野常民が
一族の関係にあることが、大差
な理由として挙げられるのではないか
いか、と興味が尽きないところで

（伊能忠敬研究会会員）

日（日）佐賀市中心街のエスカレーターとラツツ2階展示会ベースで開催されます。ぜひ、多くの方が見に来ます。さて実際に地図の上を歩いてみると、伊能忠敬が50代から挑戦したこと、日本地図に懸けた人生に思いをさせていただきたいたいのです。そして、皆さまの声で「完全復元伊能忠敬全国巡回ロード展」の佐賀開催を呼びかけましょう。

「BOOKマルシェ佐賀2009」の一環、佐賀県立図書館の「200年前の佐賀を歩こう！」（まほら）

全国的には今年4月から、伊能忠敬作成の日本地図である大圖21-4枚、中國8枚、小圖3枚を一堂に展示する「完全復元伊能圖全國巡回フローラ展」が、全国各地約50力所ほどで巡回する計画で始まっています。が佐賀県でも「完全復元伊能圖全國巡回フローラ展」が開催できればと思っております。

「御城下絵図に見る佐賀のまち」展ポスター

博物館「徵古館」(鍋島報效会)

「佐賀新聞」2009.11.5

馬場さんは佐賀県における「伊能測量の道」を研究しており、これまでも「伊能図で行く藩政期の道」(佐賀新聞 2004.11.4)

「街道・再発見 幕府測量方の本陣 伊万里道、桃川宿に行く」
(佐賀新聞 2008.9.17) など伊能関係記事が掲載されています。



お便りから

会いしています。この文をよみなつかしくなりました。

■白根貞夫さん（横須賀市）
拝啓 第57号の機関紙を送り頂き、ありがとうございます。
ございました。今回の分につき、多少書かせていただきます。68頁に贈位のことが述べられています。添付しました資料は、富山房国民百科大辞典第7巻の抜粋であります。歴学者を順に並べてみます。

渋川助左衛門 贈従四位
麻田剛立 贈従四位
高橋作左衛門 贈従四位
間 五郎兵衛 贈従五位

伊能忠敬 贈正四位 となっています。

軍人でいうと、正四位は中将、従四位は少将、従五位は大佐あたりに相当します。

伊能がダントツなのは、後世に遺した地図による功績と思われます。

次の件57頁ゴロヴニンの肖像画は、写真焼きのとき、表裏反対になっています。勲章の大綬は、右肩→左腰に、副章は左肋に帶びるものが、反対になっています。（日本の金鷲勲章のみは、大綬 左肩→右腰）。（※編集部の責任です。）11頁、大沼晃さんが、神奈川県博物館、八月一日に訪問、古山学芸員に会ったとあります。私は七月三十日、この展覧会を見にいき、古山学芸員に会いました。彼は私がもと勤めていた会社の上司の息子さんで、県博に行くと、時折お

38頁 伊能忠敬の見た風景 自転車で忠敬さんの見た風景にふれるとは妙案ですね。しかし準備もなかなかのもの。地理感覚が優れている人だと感じます。（略）小田原・湯河原間、車では何度も通っているが、歩いたことがない。かなり自転車ではきつい道のりでしようね。

三浦半島をどのように走るかと注目しています。

頑張ってください。（※以下略させて頂きます。）

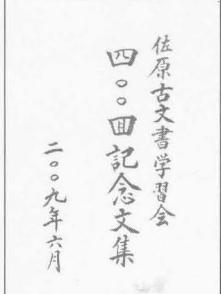
■松尾卓次さん（島原市）

「図説 島原半島の歴史」（郷土出版）伊能忠敬の島原領測量を記載しました。（二七頁参照）

■加藤忠三さん（静岡市）

今月一五日地元のふるさと塾が主催し、伊能忠敬の伊能忠敬の「下図」を使ってあるくことになりました。今回の企画に際し伊能忠敬記念館の協力でインターネット上への資料の掲載を許可していただきました。今回の企画は伊能忠敬を知つていただける貴重な機会なので私も張り切っております。終点が山島方方位記に載っている「清水湊川口」の場所になります。200年前に伊能忠敬が立つた同じ場所に立ち、当時の小方儀を使って、彼らの測量した目標を測る体験が出来るように計画しています。下記のホームページに詳細が記載されていますので見てください。

清水ふるさと塾 <http://s-furusato.net/>



佐原古文書学習会

在りし日の小島一仁先生を囲んで

成家淑子さん（香取市）

佐原古文書学習会は小島先生が亡くなられた後も会員達で月一回、佐原街並み交流館で『伊能景利日記』を輪読しあっています。今回三十五周年四〇〇回、小島先生なくなられて一年、小島先生への報告ということで記念文集を作成しました。

佐原古文書学習会は小島先生が亡くなられた

伊能忠敬研究会御案内

一、 本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどうなたでも入会できます。

二、 つぎのよう活動を行つております。《会報》—原稿締切と発行予定—

①会報の発行

第59号締切	12月末	発行	2月
第60号締切	3月末	発行	5月
第61号締切	6月末	発行	8月
第62号締切	9月末	発行	11月

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、 入会方法等

入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、

入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、 事務局所在地 (04年8月事務所が新宿区下宮比町から移転)

〒153-00042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール junko-sz@jcom.home.ne.jp

(07年8月よりアドレスが変わりました)

郵便振替口座 〇〇一五〇一六一〇七二八六一〇

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2~8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にご一任下さい。手書き、CD、メール添付可。(FD要相談)一頁は二段組31字×26行(40字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。話題、情報、近況などのお便りもお待ちしています。

伊能忠敬研究会のホームページ
「伊能忠敬研究会」公式ホームページ
<http://inoh-tadaka.org/> (休止中)

伊能忠敬研究会「資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料。(担当・坂本幹事)

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料。(担当・前田)

<http://www.ttrim.or.jp/~koko>

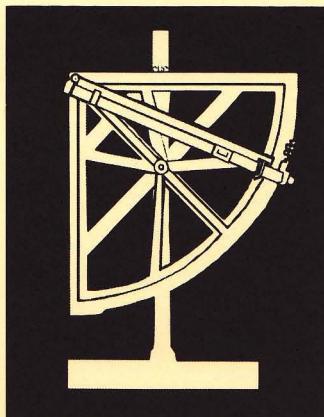
編集後記

◇九月の連休に山形県川西町にあるフレンドリープラザ内「遅筆堂文庫」を訪ねた。◇この町は作家・井上ひさしの生まれ故郷。その縁で氏の蔵書二万冊を収蔵している。◇ご厚意で書庫に入れもらうと、「山形」行きとマジックで書かれた段ボールが積み上げてあった。大量の本が毎月届くので、整理が追いつかないのだそうだ。◇『四千萬歩の男』を執筆した時の資料を見せてもらった。書棚三本分に詰まつた本は驚いたことにほとんどが根本資料だった。一番驚いたのは『測量日記』を原文(毛筆)のコピーで読んでいたことである。『四千萬歩の男』は一九八六年の刊行、佐久間先生の活字本『測量日記』は一九九八年の刊行、一〇年以上も井上ひさしのほうが早かつたのだ。◇井上ひさしは「徹底的に調べてからでないと書けないタイプ」なのだそうで、書棚には、曆学・数学・測量学、房総の民俗など、さまざまな分野の資料が揃えてあつた。あれらの本に目を通してから書いたのだとすると、「遅筆堂」井上ひさしは、全然遅筆ではない。(M)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.58 2009



TOPICS I

- Historic Spots about Inoh Tadataka (8)
- Supplement of "The Inoh Maps"
- Exhibition of "The Large-Scale Inoh Maps" in Saitama

Sudo Ikuo	1
Editorial Department	2
Editorial Department	4

TOPICS II

- Inoh Tadataka and Kanazawa-Hakkei
- Three Places in "Urashima Sokuryo-Zu" were Identified
- Place Names and Landscapes in "Inoh Daizu Soran" (12)
- Asakusa Observatory / Address of thanks to Commendation
- A Visit to Ukishimagahara Natural Park
- The Inohs as a Sake Brewer

Onuma Akira	6
Editorial Department	15
Hoshino Yoshihisa	16
Sudo Ikuo	23
Onuma Akira	24
Watanabe Ichiro	26
Inoh Yoko	28

FROM VISITORS' REGESTERS

ARTICLES

- Study of Inoh Tadataka (8)
- Kashiwagi Family Documents (4)
- Nationwide Measurement by Inoh Survey Team
- Fine Book "Inoh Tadataka" (2)

Ishiya Haruka	30
Kashiwagi Takao	42
Sakuma Tastuo	48
Maeda Koko	55

INOH-JUKU

- A Visit to Ohno Yasaburo's Grave

Suzuki Junko	60
--------------	----

BRANCH REPORT

- Report of Kyushu Branch
- Report of Niigata Branch

Ishikawa / Baba	62
Kakimi Soichi	64

MEETING ROOM

- Letters from Members Daily Topics and Informations

Editorial Department	65
----------------------	----

Edited and Published

by

THE INOH TADATAKA SOCIETY